

4817

特/2

72

AESOP'S
FABLES.

新譯
伊蘇
百物語

青溪散史譯

積善館發兌

特 12
72



鈴木青溪釋

新編 伊蘇普物語

大坂 積善館藏版



●第十二譚	水星明神と勞働者	一一
●第十三譚	笛を吹く漁夫	一二
●第十四譚	二人の兵士と盜賊	一三
●第十五譚	老婆と醫師	一四
●第十六譚	無尾狐	一六
●第十七譚	鳩と鴉	一八
●第十八譚	鷓鴣と鷹	一八
●第十九譚	射術家と獅子	一八
●第二十譚	蟻と蚤	一九
●第二十一譚	狐と獅子	二〇
●第二十二譚	馬と園夫	二一
●第二十三譚	蜂と山鳥と農夫	二二
●第二十四譚	鬮と鷄と鷓鴣	二三

●第二十五譚	羊飼と家犬	二三
●第二十六譚	農夫と蛇	二四
●第二十七譚	北風と日輪	二五
●第二十八譚	釣人と小魚	二五
●第二十九譚	福神と大工	二六
●第三十譚	山羊と野葡萄	二八
●第三十一譚	犬に噛れた人	二九
●第三十二譚	猿と駱駝	二九
●第三十三譚	好事な小兒	三〇
●第三十四譚	鳥と鶴	三三
●第三十五譚	老牛と小牛	三三
●第三十六譚	老爺と二人の娘	三三
●第三十七譚	三人の商賈	三五

●第三十八譚 賣卜者……………三五

●第三十九譚 羊の皮を着た狼……………三六

●第四十譚 野牛と山羊……………三七

●第四十一譚 絶壁の山羊と平地の狼……………三七

●第四十二譚 老衰の獅子……………三八

●第四十三譚 海岸の旅人……………三九

●第四十四譚 羊肉を食ふ牧羊者……………四〇

●第四十五譚 犬と生皮……………四〇

●第四十六譚 游泳をする少年……………四一

●第四十七譚 家主と家犬……………四二

●第四十八譚 野猪と狐……………四二

●第四十九譚 獲物を獅子に奪られた狼……………四三

●第五十譚 狼と羊の番犬……………四四

●第五十一譚 馬と騎馬武者……………四五

●第五十二譚 鴉と水星権現……………四六

●第五十三譚 二頭の驢と盗賊……………四七

●第五十四譚 鴉と羊……………四八

●第五十五譚 美男兒と醜女兒……………四九

●第五十六譚 眠鼠の母と子……………五〇

●第五十七譚 駱駝と歳神……………五一

●第五十八譚 老衰の獵犬……………五二

●第五十九譚 山羊仔と狼……………五三

●第六十譚 旅から歸つた人の高慢……………五三

●第六十一譚 鹿と野葡萄……………五四

●第六十二譚 天帝と密蜂……………五五

●第六十三譚 犬と秣槽……………五六

●第六十四譚	鶴と雁.....五六
●第六十五譚	猿と海豚.....五七
●第六十六譚	牝獅子.....五八
●第六十七譚	蛙と鼠と鷹.....五九
●第六十八譚	鹿兒と其母.....六〇
●第六十九譚	鷲と狐.....六一
●第七十譚	小兒と 益と蠅.....六二
●第七十一譚	狐と山羊.....六二
●第七十二譚	蜂と蛇.....六四
●第七十三譚	乳母と狼.....六五
●第七十四譚	二人の旅行者と斧.....六六
●第七十五譚	老人と死神.....六七
●第七十六譚	水を飲みたがる鳩.....六八

●第七十七譚	福神を賣る人.....六八
●第七十八譚	鼠と鱈の戦争.....六九
●第七十九譚	獅子王の管轄.....七〇
●第八十譚	太子と畫獅子.....七一
●第八十一譚	母猿と子猿.....七二
●第八十二譚	生擒に遭ふた鷲.....七三
●第八十三譚	農夫と狐.....七三
●第八十四譚	獵夫と樵夫.....七四
●第八十五譚	橄欖樹と無花果樹.....七五
●第八十六譚	二個の過失齣.....七六
●第八十七譚	蝮蛇と鱧.....七六
●第八十八譚	金満家と柔皮商.....七七
●第八十九譚	犬と兎.....七七

●第九十譚 野牛と女獅子と猪獵夫……………七八

●第九十一譚 駱駝……………七八

●第九十二譚 猫と鶏……………七九

●第九十三譚 蟹と狐……………八〇

●第九十四譚 二疋の蛙……………八一

●第九十五譚 牧羊者と狼……………八一

●第九十六譚 腹と支脊……………八二

●第九十七譚 鴉と蛇……………八三

●第九十八譚 猫と愛神……………八四

●第九十九譚 鷹と鷹と鳩……………八五

●第一百譚 花鶏と燕子……………八六

●第一百一譚 盜賊と鶏……………八六

●第一百二譚 乘馬と驢馬……………八七

●第一百三譚 旅人と運命の女神……………八八

●第一百四譚 二疋の蛙の移住……………八九

●第一百五譚 鹿と羊と狼……………九〇

●第一百六譚 猫と鳥……………九〇

●第一百七譚 雀と兎……………九一

●第一百八譚 敵同士の人……………九二

●第一百九譚 食牛と屠丁……………九三

●第二十譚 暴犬……………九三

●第二十一譚 旅人と犬……………九四

●第二十二譚 牝鹿と獅子……………九五

●第二十三譚 驢馬と牧者……………九六

●第二十四譚 秃頭翁と蠅……………九六

●第二十五譚 醫師に化れた補鞋匠……………九七

● 第二百二十九課 醫師になつた蝦蟇……………一一一

● 第二百三十課 猫と鷄と女猪子……………一一二

● 第二百三十二課 蚊と牛……………一一四

● 第二百三十三課 海豚と鯨と鰐魚……………一一五

● 第二百三十三課 驢馬と蛙……………一一五

● 第二百三十四課 捕鳥奴と蝮蛇……………一一六

● 第二百三十五課 黒奴……………一一七

● 第二百三十六課 虎と鶴……………一一七

● 第二百三十七課 狼と獅子……………一一八

● 第二百三十八課 膨脹た狐……………一一八

● 第二百三十九課 鵠と鷄鳥……………一一九

● 第四百四十課 泉と蟲齋……………一二〇

● 第四百四十二課 兇殺人……………一二一

● 第一百十六課 獵師と騎馬武者……………九九

● 第一百十七課 犬と獅子の皮と狐……………九九

● 第一百十八課 驢馬と狼……………一〇〇

● 第一百十九課 蚊と獅子……………一〇一

● 第一百二十課 牝山羊と狼……………一〇二

● 第一百二十一課 牧羊者と牛仔……………一〇三

● 第一百二十二課 兎と獅子……………一〇四

● 第一百二十三課 驢馬と驢……………一〇四

● 第一百二十四課 驢馬と買人……………一〇五

● 第一百二十五課 狐と狐……………一〇六

● 第一百二十六課 驢馬と駁馬……………一〇七

● 第一百二十七課 鷄柴奴と山鳥と鷄……………一〇八

● 第一百二十八課 乘馬と磨舎業……………一一〇

●第四百十二譚 農夫と獅子……………一二三

●第四百十三譚 太陽を訴へる蛙……………一二三

●第四百十四譚 人と獅子の争……………一二四

●第四百十五譚 神佛の議論……………一二四

●第四百十六譚 農夫と鶴……………一二六

●第四百十七譚 赤禿頭の武士……………一二六

●第四百十八譚 狼と羊仔……………一二七

●第四百十九譚 狼と家犬……………一二九

●第四百五十譚 負傷の狼……………一二九

●第四百五十二譚 獅子に使役れる狐……………一三〇

●第四百五十二譚 獅子と牡猪子……………一三一

目錄終

新譯 伊蘇普物語目錄下

●第一譚 孔雀と鶴……………一

●第二譚 蠅と蜜壺……………二

●第三譚 熊と狐……………全

●第四譚 豕と羊と山羊……………三

●第五譚 旅人と熊……………全

●第六譚 獅子の戀慕……………五

●第七譚 驢馬と狒狗……………六

●第八譚 家鼠と林鼠……………七

●第九譚 橡樹と蘆……………一〇

●第十譚 蝙蝠と鮑……………一二

●第十一譚 佛像を運ぶ驢馬……………一二

●第十二譚 狐と鶴……………全

●第十三章 偽孔雀……………一四

●第十四章 捕鎖のなき門……………一五

●第十五章 樅樹と木覆盆子……………一七

●第十六章 犬と影……………全

●第十七章 兎と龜……………一八

●第十八章 銅師と家犬……………一九

●第十九章 兒輩と蛙……………全

●第二十章 窮理學者……………二〇

●第二十一章 田舎娘と牛乳壺……………二一

●第二十二章 魚賣と門候……………二二

●第二十三章 好戯の驢馬……………二三

●第二十四章 蛇と鷲……………二四

●第二十五章 農夫と鶴……………二五

●第二十六章 狐と葡萄……………二六

●第二十七章 寡婦と牝鶏……………全

●第二十八章 國王と蜘蛛……………二七

●第二十九章 牧童と狼……………二八

●第三十章 懶惰鼠……………二九

●第三十一章 驢馬と狐と獅子……………三三

●第三十二章 守錢奴……………三四

●第三十三章 偽獅子……………三五

●第三十四章 馬と鹿……………三六

●第三十五章 蟻と鳩……………三七

●第三十六章 燕と蛇と裁判所……………全

●第三十七章 獅子と歳神と象……………三八

●第三十八章 蚤と老翁……………四〇

●第三十九課 牧者と羊……………四一

●第四十課 農夫と林檎樹……………四二

●第四十一課 俘囚にあつた噓呷手……………四三

●第四十二課 吉天子と雛……………四四

●第四十三課 盗賊と飼犬……………四六

●第四十四課 旅人と椰樹……………四七

●第四十五課 娶婦と綿羊……………四八

●第四十六課 狼と羊……………全

●第四十七課 片眼の鹿……………四九

●第四十八課 瓶と水瓶……………五〇

●第四十九課 狐と伐木者……………五一

●第五十課 兒鬢と母鬢……………五二

●第五十一課 猿と旅人……………五三

●第五十二課 山羊を取失つた山羊飼……………五四

●第五十三課 蚊と牛……………五五

●第五十四課 河と海……………五六

●第五十五課 蚤と力士……………五七

●第五十六課 燈火の火言……………全

●第五十七課 孔雀と愛神……………五八

●第五十八課 轡牛と耕牛……………五九

●第五十九課 鷲と甲斐……………六〇

●第六十課 犬と料理人……………六三

●第六十一課 燕と鴉の争論……………六四

●第六十二課 一羽の壺……………全

●第六十三課 物真似師と田舎漢……………六五

●第六十四課 魚網にからされた猿……………六八

●第六十五譚 二頭の家犬……………(ナシ)……………全

●第六十六譚 狐と猿……………六九

●第六十七譚 小兒と犬……………七〇

●第六十八譚 小兒と犬……………七三

●第六十九譚 獅子と鼠……………七八

●第七十譚 樹と斧……………七九

●第七十一譚 ヘルキユリス権現と挽車夫……………八〇

●第七十二譚 老寡婦と下婢……………八一

●第七十三譚 兎と蛙……………八二

●第七十四譚 狼と鶴……………全

●第七十五譚 農夫と兒輩……………八三

●第七十六譚 野羊と牧者……………八四

●第七十七譚 捕鳥奴と山鳥……………八五

●第七十八譚 商人と驢馬……………八六

●第七十九譚 半部屋の鹿……………八七

●第八十譚 燒炭夫と洗濯夫……………八八

●第八十一譚 狐と假面……………八九

●第八十二譚 驢馬と馬……………九〇

●第八十三譚 病みたる鹿……………全

●第八十四譚 海龜と鷲……………九一

●第八十五譚 羊仔と狼……………九二

●第八十六譚 驢……………九三

●第八十七譚 胡桃樹……………全

●第八十八譚 二羽の鶴……………(ナシ)……………九四

●第八十九譚 水溜に立た鹿……………九六

●第九十譚 矢に中つた鷲……………九七

- 第九十一譚 鶏と寶玉……………全
- 第九十二譚 鶏と犬と狐……………九八
- 第九十三譚 男一人に妻二人……………九九
- 第九十四譚 獅子と熊と狐……………一〇〇
- 第九十五譚 牛と蛙……………全
- 第九十六譚 老婆と酒場……………一〇一
- 第九十七譚 柘榴と林檎と木履盆子……………一〇二
- 第九十八譚 獅子と驢馬と狐……………全
- 第九十九譚 兎と狸犬……………一〇四
- 第一百譚 盲人と狼仔……………全
- 第一百一譚 驢馬と蟲齋……………一〇五
- 第一百二譚 歳神と猿……………全
- 第一百三譚 犬と蚊蟻……………一〇六

- 第一百四譚 獅子と蜂……………一〇七
- 第一百五譚 獅子と狐と狐……………一〇八
- 第一百六譚 番叢と鶏頭……………一一〇
- 第一百七譚 踊る猿……………一一一
- 第一百八譚 兎と狐……………一一二
- 第一百九譚 龍と虎……………全
- 第一百十譚 狐と狐……………一一四
- 第一百一十一譚 獅子と兎……………一一五
- 第一百一十二譚 樺木と歳神……………一一六
- 第一百一十三譚 狐と狐と猿……………全
- 第一百一十四譚 鼠と野牛……………一一七
- 第一百一十五譚 獅子と羊飼……………一一八
- 第一百一十六譚 蕨父と小魚……………一二〇

●第百十七章	馬と鬪夫	一三二
●第百十八章	童子と補	全
●第百十九章	狐と朝	一三三
●第百二十章	師と漁夫	一三三
●第百廿一章	馬と主人	全一六
●第百廿二章	王を求むる蛙	一三五
●第百廿三章	黄金の卵を生む化鶴	一三六
●第百廿四章	菊と鼠	全二八
●第百廿五章	盜賊と母	一三九
●第百廿六章	豹と狐	一三〇
●第百廿七章	馬と雄鶏と獅子	一三〇
●第百廿八章	洋飾と海	全〇八
●第百廿九章	馬と影	一三一

伊蘇普物語上

青溪散史譯

●第一 譚 亞刺比亞人と駱駝



或る亞刺比亞人が自分の飼て居る駱駝に貨物を載けてサア是から出
 去ると云ふ所、汝は山路を登て行くのが宜いか又は下りて行くのが
 と尋ねますと駱駝は何の考へもなく「旦那、廣い平
 常の路は塞がりまゝたか
 世の中を渡るにも平坦な道が何より宜い

●第二 譚 一頭の獅子と三頭の牛

或る野原に三頭の野牛が睦しく暮して居ますと其近邊の山に住居て
 居る獅子が此野牛を餌食にたゞいと常々思て居ましたか何分にも三
 頭一處に居ては已にも奪憎いと夫より思ひまゝて夫より三頭の中の

割るやういろく水をとります三頭の間は紛議が起り終に別れく
にたりました獅子は此所ぞと餌壺に入り其牛を一ツく奪殺し
ウく三頭とも己れが餌物にして日頃の望を果しました
敵の離間を謀るは軍機秘密でござります

◎第三譚 鴉と白鳥

或る鴉が白鳥の羽根の眞白なのを見て日頃羨んで居ました彼れは
何んでも水中に住んで居て毎日羽根の洗濯をするから如彼奇麗
にあるのだと早合点を致しまして自分が常に住んで居る近處には神社
があつて供物が澤山で自分共の餌に自由なのを見限て池や河などの
水のある所に往き毎日浴水をして羽根の手入をまました奇麗
にハなつたもの益々黒くなるばかりで白くはありませぬ其上食馴
れた食物のないのでやがて飢死を致しました

上帝の賦與れた性質を易へやうと思ふのは無理なことで御座ま
す

◎第四譚 童子と榛實

或童子が榛實の入れてある壺のうちへ手を突込み握れる丈け握つて
是れで宜いと手を抜うとまますと壺の口が狭いので手がぬけません
何卒握つた實のすこしも減すまい手の抜たいとあせりましたが爾う
旨く往ませんソコテ大聲をあげて叫喚出ますと側に立て見て居た
人が懇ろに慰めて「ア、好童見々く半分握みなさい、さうすれば手
も抜け實も取れます

僅々づゝでも幾度も取れば夥多になると云ふことを知らねばな
りませぬ

◎第五譚 狼と馬

或る狼が麥畑から出かけると平生懸意にして居る馬に邂逅まゝして「イヤ是れは馬ちゃん好い處でお目に掛つた今私は好い麥を見付たがお前に食へせたいと思つて少も口を付けずに來た早く往て喰なさい私はお前がボリ〜と食らかすのを聞て居るのが極好だといひますと馬は冷かな句調で「夫れは近頃御親切な譯で難有い、志か〜汝の食物が平生麥だつたら私の喰ふ音を聞たいとて枴い腹を堪忍へて居なざる道理もあるまい

己れが欲せざる所人に施す勿れと云ふ教訓があります此説話
はうれと反對でございます

◎第六譚 病氣の獅子

或る獅子老年となり餌食を奪ことが出来なくなりまゝしたので何たか
方便を設け寝て居て餌食を奪る工夫を志なければならぬと考へ病氣



或る狼が麥畑から出かけると平生懇意にして居る馬に邂逅まゝして「イヤ是れは馬ちゃん好い處でお目に掛つた今私は好い麥を見付たがお前に食へせたいと思つて少も口を付けずに來た早く往て喰なさい私はお前がボリ〜と食らかすのを聞て居るのが極好だといひますと馬は冷かな句調で「夫れは近頃御親切な譯で難有い、まか〜汝の食物が平生麥だつたら私の喰ふ音を聞たいとて楊い腹を堪忍へて居なざる道理もあるまい

己れが欲せざる所人に施す勿れと云ふ教ねがあります此説話
はうれと反對でございます

◎第六譚 病氣の獅子

或る獅子老年となり餌食を奪ことが出来なくなりましたので何たか
方便を設け寝て居て餌食を奪る工夫を志なければならぬと考へ病氣

第一譚



亞利比亞人と駱駝

第二譚



一頭の獅子と三頭の牛

第五譚



狼と馬

第七譚



就鳥と鴉

第十六譚



尾無狐

第十七譚



鳩と鴉

と披露して毎日洞穴の中に寝て居ました此事が世間へ聞かれますと種
種の獸類は「サアハ我等ハモウ安心と云ふものぢまか病氣とあれ
ば一度は見舞に行かすばなるまい」と追々洞穴へ見舞ひに出掛ます
と獅子は臥て居ながら計畧が中ツたと窺かに喜び見舞に來た獸の
隙を見すまゝ攫み奪てハ餌食に致しましたスルト狐ハ何でも怪しい
と思ひ實否を探らんと或日獅子の洞穴へ見舞に來て獅子王に近寄る
は不敬だと云ふ様子で入口に居て挨拶をしますと獅子は「イヤ誰れ
かと思つたら狐さんかサア、スツト此方へお寄なさい私は病氣で足
も腰も立しませんから御迎ひにも出ませんサア此方へお寄あさいナト
若い時の話でもいたさせう」と懇ろに云ひますと「狐はイヤモウな
構ひ下さるサ先づくた大事になされませと暇を告げて立歸りなが
ら一御看病もいたさず早々引退ります私を無禮な奴ぢとお思ひ下さ

るナ私は端居で挨拶うてく〜歸りますは別儀でも御座いません私の
前に御尋ね申した者どもの足跡は皆な大王の方へばかり向て居ま
て洞外へ出た足跡は一向見ぬません是に仔細のある事かと思ひッ
イ遠慮をいたしました

他人の不幸を察して自ら戒むるものは能く解理た人で、ござい
ます

◎第七譚 鴛と鴉

或時鴛が餌食を取らんと峻岨な高い岩の上から下の野原を一飛に舞
ひ下り羊仔を攫つて飛び去りました其時一羽の鴉が傍に居て鴛の伎
倆を観て羨ましく思ひ何んの吾だつて彼の位のことば出来だらうと
直に牡羊の上に飛下り、あらん限の勢力を出してムツと攫んで飛上
らうとする中を自由になりません、ろこで打棄て、置いて自分獨り

で飛去らうとする羊の毛が爪に引か、ッて飛ぶ事が出来ません頻
り羽敵をして困却て居ますと羊飼がこれを見つけ早々其處へ出て
来て鴉を捕押へ其羽根を剪つて小童に與りました小童はこれを見て
「阿爺此鳥は何んだ」と尋ねますと「吾儂は鴉と思つて居るが汝が若
し鴉に聞たら私は鴛でございませすと、いふかも知れぬ

◎第八譚 病氣の鶯

永く病氣で臥てるる鶯の枕頭に母鶯が介抱して居ますと「阿母さん
其様鬱々思はないで直に神様へ参詣して私の病氣が全快る様に祈願
をかけてお呉れさうすると速く快りますから」と言へば母鶯へ「嗚呼
お前は何の神様へお祈願申たらお情を掛けて下さるとお思いや前
が平常御供物を荒さない神様がありますか

艱難の時に扶助を得たいと思ふものゝ幸福の時に友人を求めて

おかねばなりません

●第九譚 鳥と獸と蝙蝠

或日鳥と獸との間に軍が起り暫時は勝敗のほども分りませんでした
が此時蝙蝠の鳥とも獸とも屬かぬ形容ゆゑ其譯を言立て彼軍此軍へ
も屬かず旗色を見て獸の方が勝色になると其方へ加はり鳥の方が勝
色になると鳥方になり何時も好い顔をして居りますと其中に戦争も
和睦になり双方の鳥獸が寄集まりました時孰れも蝙蝠の二心を惡み
双方ともに仲間に入れず以後決して白晝に飛廻り又た奇麗な所に
住むべからずと申渡され其後の軒の片隅や汚穢い洞穴に潜み黄昏に
飛廻はるばかりで肩身せまく世を渡ることになりました
人も二心あるものは其末期は哀れな身分になります

●第十譚 獅子と海豚

或る獅子がたま〜海岸を徘徊して居ますと海豚が波の間から頭を擧
げたのを見て「何んど貴君と私と同盟をして相互に助け合ふではご
さいませんか吾の獸の王で足下は魚の王だ實に好朋友々相應た盟友
だ」と云ひますと海豚は成程左様だと思つて直に同意して獅子と同
盟しました其後獅子と野牛とが戦争を始めますと獅子は海豚に使を
遣り同盟の譯ゆゑ援兵を頼むとの事に海豚は早速承諾はしたもので
如何しても上陸することが出来ないの愚圖〜と居りますと獅子
は大きに憤怒を發て「我を騙したぞ」と罵詈雑言を言ひますと海豚は「うんな
に我を惡くお云ひなると元來私の性質は海中での強勢なものだが
陸に上ては些少も役に立たないのサ

友朋を撰ぶるに先づ其性質を見定めねば非常の時に益にたゝな
いばかりか或は害になることがあります

●第十一譚 衆鼠の議事

諸の鼠が猫の爲めに害に遭ふもの、多いのを憂ひ好き防禦法を相談せんとて或夜會同を開けました。是れぞと思ふ好い方法もありません是非なく會議を開やうとする時一疋の小鼠が末座より進み出で「我の考へでは猫に奪らるゝのハ畢竟私共の油断から起るのです此の後ハ猫の頂領に鈴を着けて置き鈴の音が聞へたら影を隠すといふ譯にまたら宜からうと思ひます」と述べましたソコデ皆々感服して以後此策畧を用ひやうといふ事に議事が極まりました。是迄默然て居た老鼠が咳一咳をして坐中をきつと見まわし「今の策畧は如何にも名案妙考で其効能も大したものは相違ないが茲に私の聞て置たいことがある一体何某殿が猫の領に鈴を着けに參らるゝや理論と實際とは違ふことが間をあります

●第十二譚 水星明神と労働者

或る労働者が河の畔りで樹を伐て居ますと如何にた機會かツイ斧を水中へ取落し忽ち生業の資本を失ひました貧乏人の事故大層嘆ひて居りますと此處へ水星明神が忽然とあらはれ労働者より仔細を聞召しやがて水中に沈み給ひ暫時すると黄金の斧を持出給ひ「汝の斧は是なりやと問ひ給へば労働者はよくよくこれを見て「否是れは私の斧でございませせん」と答へました明神再び水中に入り今度は銀の斧を持出給ひ「是れこそ汝の斧なるべし」と示し給ふと労働者は是を見て「否是れも私の斧ではございませせん」と答へました水神又々水中に入り更に鐵の斧を持出給ひ「是れなるか」と問給ふと労働者は雀躍して「是れこそ私の斧に違ひ御座りませせんアラ難有や嬉や」と三拜九拜して喜びますと水神は其正直を賞め給ひ一人は斯くあつてこそ幸福

を受くるなれ」と鐵の斧に金銀の斧をも取添へて下されまじけたサテ
 此働勞者は夕方になると居村へ歸り今日の始末を同業のものに話し
 ますと或る慾の深い老翁が翌朝早々右の河邊へ行き樹を伐るやうな
 風体をして斧を水中へ投げ込み河原へ打伏り宛も哀しげに泣いて居ま
 すと水星明神があらわれ給ひ事の始末を聞取り水中に入り給ひ暫時
 すると黄金の斧を持出給ひ「汝の斧は是れなるや」と問給ふと老翁は
 周障手を延ばし「是れが私の失ひました斧でございます」と云ひ殆ど
 握取らうと志ますと明神大に怒り給ひ其邪曲を惡みて黄金の斧のみ
 か前に失ひし鐵の斧をも與へ給はざり」と

正直は金銀を造る資本でございます

第十三譚 笛を吹く漁夫

或る漁夫が乃公の笛の名人と自慢をして居ましたが一日笛と網を

もつて海邊に行き網の近邊へ廣げてをき上手に笛を吹けば魚は其調
 子に乗つて濱へ躍上るだらうと宛も面白さうに笛を吹いて居ました
 一時間を過ても二時間を過ぎても一尾の魚も躍上りませんうと漁
 夫は是でへ不可ぬと笛を投捨て網を打下ますと數多の魚が漁れて
 頻りに躍跳ますゆゑ漁夫は笑ひながら「エー己が笛を吹ても汝輩は
 少くも躍らないで止めて居ると躍跳出すとへ不埒な奴等だ
 人を見て法を説かねば少くも感動のないものでございます

第十四譚 二人の兵士と盜賊

二人の兵士が連立て或所へ旅行をなす山中へ差かゝりますと盜賊に
 出遇ひ一人の兵士は卑怯にも逸散に逃出しましたので是非なく跡の
 一人は刀を抜て渡り合ひ漸くこれを斬伏せました其時逃出した一人
 の兵士の遙か遠方より賊の斬られたのを見て勢ひ鋭く引還し旅被を脱

二

棄て刀を引き抜き振りかざし、「拙者が賊を引受たり拙者の手練を見
せて呉れん」と大音聲に呼立ますと賊と戦つた一人の兵士は回顧して
「假令今の聲ばかりでも戦つて居るとき出て呉れれば何のくら
ゐ加勢になつたか知れない、さかゝモウ事が終んだから刀は鞘に納め
たまへ又た足下の心底を知らぬ人を欺すまでの先づ〜黙止して居
るが宜いヨ僕は今も足下が如何程の速度を以て逃げらるゝかを發見
した僕は足下の勇氣にはどんな事でも依頼の出来ないことを知りま
す

危難に遇へば友人の心底は直に解ります

◎第十五譚 老婆と醫師

或る老婆が永らく眼病を煩ひ遂に眼が見へなくなりまゝたから或る
醫師を招いて証人をも立て「若し私の眼病が全快まゝたら金銭何程

を進呈ませう又た先生の御治療が驗効ませんで全快ませなんだら少
しも御禮の致しませぬ」と約束を致しまゝたそこで醫師も承知のう
へ治療に取かゝつた偽をして折々見舞に往き其都度老婆の所持品を
少〜づゝ持出し是れでよ〜と思案して夫から眞實の療治を施し、ま
すと直に眼が見ゆる様になりまゝたサア約束の通り謝禮が受けたい
と云ひますと老婆は「成程先生の御庇蔭で眼が見ゆる様にはなりま
したか私の所持品は悉皆何處へか失せて仕舞まゝたゆゑ餘儀なくお
謝禮が出来ません」との答へに醫師は承知せず何でも蚊でも拂がして
もらいたいと度々催促をしても老婆は一向受けまかせん唯だ苦情は
かり言て時目を送つて居ますと醫師は最早勘辨が出来ないとて、ど
う〜裁判所へ藥代請求の訴訟を起し、たので老婆は法廷に出で
「成程原告の申立の通り私の眼が見ゆる様になりさへすれば如何程

の御謝禮でもいたします若し此まゝになれば少しも御謝禮はいたさぬと約束をいたしおした私が私は原告の言ひます通り私の眼が全快たとは思ひません何故なれば最初私が煩ひ付て彼先生の御見舞を頼みまゝた時には未だ私の家内の諸道具や品々の眼に見えて居まゝたが今では其諸道具や品々は少しも私の眼に見えなくなりまゝた是れでも薬禮は拂はなければなりませんか

◎第十六譚 無尾狐

或る狐が一度竊に罹つて尾を挟まれ逃げやうと思つても逃げられませんから命には替へられぬと思案を極めて尾を引切て遁げまゝた、ソコデ此無尾狐が熟々と考へますに「ア、吾は生れもつかぬ不具者になつて仲間の前も耻かゝい寧ろ死んで仕舞はうかイヤ、死んで物は食ふことも面白ひことも歩行事も出来ない夫よりか爰に好思

案がある、何んでも他の諸狐にも尾を切らせて世間に尾のある狐は不具者と言はせる様にすれば吾が耻にかならぬ悔んで死ぬほどのことない」と考へまゝして急に狐會議を開き「皆さん何んでも我が眞似をして尾を切て仕舞なさい私が如斯に身軽く運動することに御氣が付かれませんか私の尾のあるうちは斯まで便利などは思ひませんでした、それが今では何故早く尾を切なかつたかと後悔するほど便利でス、考へて考へて見ますと尾といふものゝ重いはかりか穢い長物なものでス御同類の貴狐方にも此事をお聞かせ申したいと思ひまゝして故々今日集會を願つた譯でス」と辨に任せて饒舌てますと古狐が一正進み出で「無尾君の御親切は如何にも難有譯ですが若し貴公が尾を失さなうたら其様に我々に尾を切るが宜いなど、御勸めなごりもなさるまい人も身勝手なことを言ひますから中々油断のなりません

第十七譚 鳩と鴉

或鳩が籠の中に飼はれて居て「吾れには數多の眷族があるんぞ」と高言を吐て居ますと當時其屋根の上に鴉が来て「なんと汝は馬鹿なことを自慢して居るモウ止せ」汝は眷族が數多あれば數多あるほど猶更籠の鳥々と云ふことを餘計に欺かなければならぬのぞ

第十八譚 鷗と鳶

或る鷗が大きな魚を攫んで一呑に吞やうとして咽へ引掛け苦しい所から濱邊へ倒れてグウ〜言て居ますと其上を飛廻つて居る鳶が一言の慰諭を申さうかと少〜舞下りまして「其れは丁度汝に相當して居るを空中の鳥が海中より食物を求めるといは不得心の事ぞ
己れの分限を守らないと苦〜みは多いものでござります

第十九譚 射術家と獅子

或る射術家が山奥へ獵に行き此處其處と獸を尋ねて廻つて居ますと獸はソラ射術の先生が來たぞと一目散に逃げましたが獅子は「ナニ弓術の先生位へ怖はくない」と齒をむき出して威張て居ました先生が其處へ出て來て「待て汝に示すべき一事あり我使者を差向け」と手早く弓に矢をつがへ切て放しますと其矢が獅子の洞腹を貫通りましたので、獅子は吼苦みながら崖の中へ逃込もうとするを傍に隠れて見て居た狐が「物真似をして威勢をつけて敵に反撃へと勤めますと獅子が頭を掉て「狐サン汝モウ勤めて下さるな彼人の使者でさへ如斯強ひものを、本人の力量は如何位か知れるものか
強きを恃み恐るべきを恐れされば不覺の禍あり

第二十譚 蟻と鳥翁

數多の蟻共が冬の日暖かな天氣に夏の日に取收た食物を乾かして居

まずと飢つかれた蟲齋が「ながら其處へ出て来て「何卒お助けに少しなりとも其餌食をお分け下され私は此節何も食はずにります」と歎きますと一疋の老年蟻が「如何さま御邊は蟲齋であつたナ此夏中何をして暮らされた」と尋ます蟲齋は「イヤ別段愉快なこともありませんでしたか歌を謡て暮らしました」と答へますと數多の蟻共が其言詞を聞いて嘲笑ひ「イヤ其れでは何も合力するは無益ナ事々我々は夏の炎天に照らされながらポツ／＼餌を拾ひ集めて此冬枯の用意をいたんが其がから今日にあつても飢へるやうなことはない、長の夏中歌など謡て面白く暮らしたものは冬にみると食物を探索して踊りまわらねばならぬ

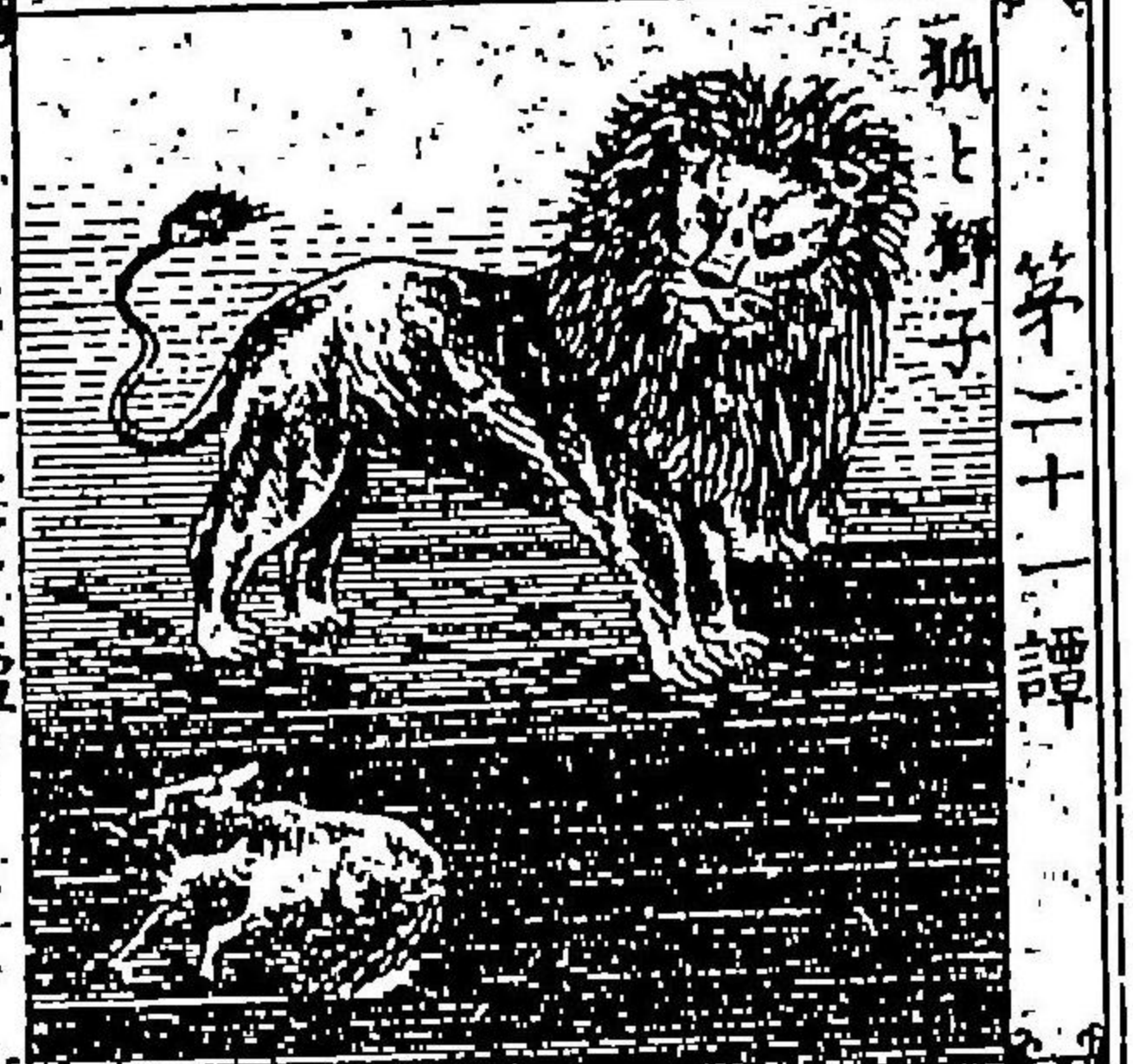
労働は安樂の基本でございます

◎第三十一譚 狐と獅子



獅子と狐

第十九譚



狐と獅子

第二十一譚



馬と困夫

第二十二譚



鶏と鶇

第二十四譚



北風と日輪

第二十七譚



釣人と魚

第二十八譚

まずと飢つかれた鳥翁がしながら其處へ出て来て「何卒お助けに少
 くなりとも其餌食をお分け下され私は此節何も食はずにります」と
 歎きますと一疋の老年蟻が「如何さま御邊は鳥翁であつたナ此夏中
 何をして暮らされた」と尋ます鳥翁はイヤ別段愉快なこともありま
 せんでしたか歌を謡て暮らしました」と答へますと數多の蟻共が其言
 詞を聞いて嘲笑ひ「イヤ其れでは何も合力するは無益ナ事ダ我々は夏
 の炎天に照らされながらポツ／＼餌を拾ひ集めて此冬枯の用意をし
 たんだ其がから今日にあつても飢へるやうなことはない、長の夏中
 歌など謡て面白く暮らしたものは冬にみると食物を探索して踊りまわ
 らねばならぬ

労働は安樂の基本でございます

◎第二十一譚 狐と獅子



第十九譚



第二十一譚



第二十二譚



第二十四譚



第二十七譚



第二十八譚

或る狐が未だ獅子は如何なものだか見た事がありませんで、たが途中で初めて邂逅した時の恐怖して死ぬやうに思ひました其後又た邂逅した時は度胸がすはッて如何なものに恐るゝものかと言ふ心になりました其後又々邂逅した時はズツト大胆になり傍へ近寄て「イヤ大王如何でげすな杯と言詞を掛ける様になりました

餘り懇意になりますとツイ侮る心が起るものですよ〜注意しなればなりません

◎第二十二譚 馬と園夫

或園夫が飼馬の豆秣を盗んで賣代なく主人に怪まれてはならぬと終日其飼馬の毛を梳り立たり浴水をさしたりして美しく見せんと働いて居ますと馬が「足下、私を美しく見せやうと、お思ひならマア其梳たり浴たりするのハ大抵にして置いて食物を充分下さいませ〜

枝葉を茂らせやうと思へば能く其根本を養はねばありません

●第二十三譚

蜂と山鳥と農夫

蜂と山鳥が懇慰の時候が過ぎてなりましたから近邊の農家へ飛び込み「御無心ながら水を一杯飲んで下さるまいか決して水を頂戴したばかりで御禮を為さないやうな私たちではありません山鳥は主公の植へて御座る葡萄の根の周圍を穿て土を和らげ本年から葡萄の實入の好くなるやうに仕ませう蜂は劔を振廻して盜賊などの來ぬやうに志ませう」「さういふと農夫の頭を掉り「イヤ」我れは以前から二頭も牛を飼つて其牛の約束も何も志ないが好く働いて呉るから汝達に水を遣るよりは牛に遣る方が肝要じや

馴々しく言ふからとて新來の人を召使ふより少々の不足な所があつても舊來の人を使ふのが安心でございます

●第二十四譚

闘鶏と鷄

二羽の雄鷄が一箇の餌壺を奪合ふて果の蹴闘をはじめトウトウ乙鷄が蹴付けられて「ロロ」して鷄舎の一隅へ逃込み小さくなつて隠れて居ますと勝誇つて居る甲鷄の屋根の頂上へ上り鼓翼をしながら大聲で凱歌を奏げました其時丁度或る大鷄が空中を飛んで居て好き餌食を見つけたと看なく舞下つて唯だ一掴に攫去らひ遙く虚空へ飛上りましたさうすると最前敗戦た乙鷄が鷄舎の一隅から飛で出て以前奪合した餌壺を我所有にしました

戦争をしてても餘り勝ほけると不意な失敗を招きます

●第二十五譚

羊飼と家犬

或る羊飼が黄昏になつて其處等に遊んで居る羊を呼集め欄の内へ追込む時誤つて狼を羊と共に閉込て氣が付ずに居りますと家犬がこれ

を見て居て「主公彼の内へ狼を追込んで置いてそれで羊が食はれないと思召すか

盗賊の目前に金銀を置いて奪られるのを怪しひことはございませ

第二十六譚 農夫と蛇

或る農夫が冬の黄昏に野から歸つて来る途中で一疋の蛇が凍へて死なうとして苦んで居るを見付け此奴は人の嫌がるものだが苦しんで居る處ろを見ると不便なものだとしつと取上げ自分の懐中へ入れて二三丁歸つて來ますと蛇の暖氣を受けて活潑となり禮も云はず却つて農夫に噛付き傷痍を負せましたので農夫は其儘驚はれ「此奴を憐んだばかりでツイ如斯傷を受けた」と言ながら黄泉へ旅立を志ました人にも恩人を恩人と思はず還て害を加へるやうな人非人が間々

ありあす

第二十七譚 北風と日輪

或時日輪と北風が邂逅ひ力自慢が争ひの種となりましてイヤ拙者が強い、イヤ拙者だといふ中然らば相互に証據を顯はして強い弱いを決まやうとの事になり北風はあらん限の勢力を出して大嵐を吹起しまずと寒氣は俄かに烈しくあり旅人などの狼狽て雨具を取出すやら急に布子を着て寒さを凌ぐやら大騒ぎソコ今度の拙者の番だと日輪が雲間からヌツト顔を出し先づ平凡の光を放ちますと雲は何處ともなく散て仕舞ひ寒さも漸々消へ旅人の暖かになつたと喜んで居ますとだんぐ熱くなり果て布子を取ぎ下に着て居る褌衣まで脱いで仕舞ひ到頭眞裸程になつて水へ這入りました

第二十八譚 釣人と小魚

或る所に釣魚を生業とする小利吉と云ふがありまして夏の永い日に終日釣をして居ても小魚の一尾も罹りませんので止して歸ろうと思つて居ますと漸く一尾の小さな魚がかかりました、スルト其小魚哀れな聲を出しまして「御助け下さりませ格別な品でございませぬ價值も何もないものでございませぬ何卒御助なされて本來の水中へ逃して下さりませ私へ直に大きな魚になりますから其時お手にかゝつて立派なお料理に使はれます」と託言をまますと釣人の首を掉て「イヤ〜一旦捕へた汝を許したら其時汝は「サア捕て見給へ」と大言を吐くだらう

未來の不確實な大利を得んとするより現在の確實な小利を得る方が勝ててございませぬ

◎第二十九譚 福神と大工

或る大工が随分職業を勉強して居ながら如何言ふものか例も貧乏で困つて居ります何ぞして困らぬやうになる工夫のあるまいかと近邊を見廻しますと棚の上に福神の像がありましたソコ此福神に毎日〜供物を捧へ一心不乱に祈りましたが一向に効驗もなく益々貧乏になりますので是でいならぬと思ひ信仰の二の次にして職業に身を入れた夜晝なりに働いて居ますと足らぬながらに生計が立つやうになりまして、うこで大工のハツキとなり此奴のおかげで大損をしたと例の福神を神棚より引下ろして有合はす斧で打毀しますと其神腹から金銀が觸れ出ました大工は驚いて「是は合點の行かぬことと吾が祈つた時には少しも應驗がなくなつて今更打毀はすと如斯に御利益があるとは

職業を勉強するのが第一の信心でございませぬ

◎第三十譚 山羊と野葡萄

或圃に葡萄の樹がありまゝたが其葉は青々と生茂り實は鈴のやうに生て居ると或る日一頭の山羊が来て其葡萄の樹の皮をかじり芽を食あらそうと志ますので葡萄は大きに腹を立て「汝は已れよ何んの恨みがあつて其様事をするぞいつか此返報をするから覺て居ろ汝が犠牲になつて神様の前にひかれて来た時にやア汝の頭に注て遣るため酒を製ておくぞ

復讐は早晩か仕遂げることの出来るものですから決して他人に悪事を仕向けてはなりません

◎第三十一譚 犬に噬れた人

或人が犬に噬れて傷を受けまゝたとき誰れか此傷を治療て呉れる人はいかと東西南北尋ねて居ますと途中で知己者に邂逅まゝたゆゑ



絶壁の山羊と平地の狼

第四十一譚

羊肉を食ふ牧羊者

第四十四譚

犬と生皮

第四十五譚

第三十譚

第三十一譚

第四十譚

◎第三十譚 山羊と野葡萄

或圃に葡萄の樹がありまゝたが其葉は青々と生茂り實は鈴のやうに生て居ると或る日一頭の山羊が来て其葡萄の樹の皮をかじり芽を食あらそうと志ますので葡萄は大きに腹を立て「汝は己れよ何んの恨みがあつて其様事をするぞいつか此返報をするから覺て居ろ汝が犠牲になつて神様の前にひかれて來た時にやア汝の頭に注て遣るため酒を製ておくぞ

復讐は早晩か仕遂げることの出来るものですから決して他人に悪事を仕向けてはなりません

◎第三十一譚 犬に噬れた人

或人が犬に噬れて傷を受けまゝたとき誰れか此傷を治療て呉れる人はあいかと東西南北尋ねて居ますと途中で知己者に邂逅まゝたゆゑ

第三十譚



山羊と野葡萄

第三十一譚



犬に噬れた人

第四十譚



野牛と山羊

第四十一譚



絶壁の山羊と平地の狼

第四十四譚



羊肉を食ふ牧羊者

第四十五譚



犬と生皮

其話をすると知己者は「ア、夫れはく御氣の毒が汝夫れを治し度
なら斯う爲なさい一塊の麵包を疵口の血の中へ漬けてうれをお前さ
んを喰んだ犬にお遣なさいさうすりやア直に治ると言ひますと喰
れた人は苦笑ひをして「御親切は難有が汝のいふとほりにすると我は
町中の犬に喰まれますだらう

敵に恩を興るは我を害する敵の手術を増すのでございませう

●第三十二譚 猿と駱駝

或る時山林で獸類が大集會を催しますと猿が一座の興にとて彼の猿
舞を演ました、ところが中々上手にやつてのけたので衆獸興に入り
一時喝采の聲が山林を動かすばかりでございまいた其時駱駝ハ猿が
喝采られたのを羨ましく思ひ嫉妬の餘り遅々と座上へ進み出で踏々
舞をはじめますと満座の獸共は顔をいかめ其様見苦しい踊りは見度

ないどガヤ／＼騒ぎ立ち果ハ皆々立かゝり有合ふ棒などを打振り駢駢をたゞきすへて、到頭山林の外へ追出しまゝした

何事によらず自分相應の事をせぬと人々笑はれます

◎第三十三譚 好事な小兒

頓太郎と云ふ一人の小兒は自分の眼に觸れた物事は何によらず其儘にはまて置かないと云ふ好事な小兒で祖母さんの眼鏡を毀はしたり又た人の眼へ喫烟草を入れて困らすやうな事はかり仕出來しますので或日其母が「ヨ、頓太ヨ汝は何事にも出過るから後には自分で困ることが起るのだヤツト心得なさいヨ」と言ひましたが頓太は一向頓着かないで益々惡戯が増長して母が綴かけて居るあみ物を何時の間にか解てしまつたり妹の毛糸細工が卓の上で置けると其糸を織したり園丁が雜草を除て居ると手傳をするとして大切な草花まで引

抜て園丁を怒らせたり乳兒が玩弄の汽車を持って遊んで居ると己が車掌メカラ汽車は己れの自由にする杯と言て乳兒を泣かせ姆に叱られて育兒房から追出されたりと云ふ始末でイヤハヤ箸にも棒にもかゝらぬ小僧でございますある日の事でした父が何かの機械を買入れ機械師が持て来て父と話して居る隙を窺ひ徐々其機械の置である所へ行きソツト戸を開けて見ますと機械にハ種々の鎖も着てあり又た附屬品も澤山ありますうと頓太は嬉し氣に手を摩みながら其機械をのこらす解ほどきて又素のやぐに組立て見やうと考がへ側に在る椅子の上に這上り両手を鎖の柄に觸れますとやがてア、ア、泣叫びますから何事かと家内の人々が往て見ますと頓太ハ電氣に感じ手を離さんとしても離すことが出來ず苦んで居ました其時阿父は苦笑をしながら「到終汝は自業自得の目に遇たナ」と機械を用いて其手を離

して遣りますと云すがの頓太も是に懲りて如何に叱られても一言の答もなく狐鼠々と自分の部屋へ逃込み熟々と考へますと此廣い世界には電氣も勝る恐ろしい機械が幾許もあるから滅多に手出しへ出来ぬと思ひ此電氣がトンダ頓太の懲りめになりました

●第三十四譚 鳥と鵲

或日一羽の鳥が歎息して「アノ鵲と云ふ鳥は其飛方や鳴聲で未來の吉凶が知れるといふので人に尊ばれるが己等は如何もつまらん鳥」と獨言をいひながら近邊を見ますと二三人の旅人が遣て來ますから「己れも一番鳴て見ませう旅人が何と言ふか」と直ぐと道傍の樹にあまり聲を張あげて、カア、カアと鳴きますと旅人の一人が喫驚して仰向ながら「ハテ彼鳴聲は何の前兆だらうナア」といひますと同伴の一人が笑ひながら「サア、く、行きませう、ナニ彼れは何の前兆でも

ありヤア、ない鳥のカアだ

身分不相應のことをすると世間の笑ひものになります

●第三十五譚 老牛と小牛

一頭の老牛が日暮前に自分の部屋へ歸らんと狭い路を無理に通らうとて骨を折て居ますと之を見て居た小牛がわざ／＼出て来て「私が先へ立て汝の通り好い道筋を教へませう」と云ふと老牛が頭を擡て「構ハツ、やるナ乃公は汝が生れない前から此路をよく知て居るのだ

兎角老者は強情で困ります

●第三十六譚 老爺と二人の娘

或る爺父が二人の娘を持て居ましたが二人は植木屋へ婚禮け二人は製瓦工へ嫁入らせ夫より二三日も経つと其植木屋へ尋て行き「如何

じや家内の居合ハよいかな如何な様子じや」と尋ねますと娘ハ「御案
 じ下さいますな萬事都合が宜う御座ます、うして我家の營業では一
 ツの願事があります何んでも植木の爲めには充分に雨が降らないと
 なりません、うして私は雨の降るやうに願ッて居ます」と云へば爺父
 は「左様か夫は先づ一安心だ」と其家を出て今度は瓦屋へゆき「姉の
 方は大層好い都合じやが汝の方ハ如何な盛梅じや」と問ひますと娘
 ハ「ハイ難有う御座います家内の居合も至極宜う御座まして私ハと
 んど外に苦勞ハありませんが何んでもお天氣が續きまして日が焼つ
 くやうに照りますと瓦が好く乾上りますから私は好天氣のみ願つて
 居ます」と言ひますので爺ハ途方に暮れ「ア、汝は好晴天を願ひ姉の
 方への雨を願ふては私は孰を願ひませう」と云へば爺父は「業に依て其の願ひ事の違ひます」

◎第三十七譚

三人の商賈

或市府が敵に圍まれた時何して防いたら宜からうと町中の人が集り
 會議を開きました其時煉化石商が第一番に進み出まして「此防禦法
 に用ふべきものは煉化石より外に宜いものはありません」と云ひま
 すと材木商が勃然として「イヤ材木を用ふるのが第一の計略でござ
 います」と辨じましたスルト革商が憤然とあり「諸君は發言に税が出
 ないと言たい事はかり言ハつゝやる世の中に革ほど結構な品物が
 ありますか
 人は皆な自分の爲めのみをいふものでございます

◎第三十八譚

賣卜者

一人の賣卜者が市場へ店を出して人の吉凶を卜なつて居ました或
 人が大急で駈けて來て「ナイ爺翁今も汝の家の戸が打破られて居る

から怪しいと思つたら盜賊が忍入たのダセ」と知らせまふたら賣卜者ハ仰天して手に持つた筈竹ハ其處へ投出急ぎ我家へ走せ歸りますと隣家の人々が入口よ立て居て「イヤ先生遅かつた先生を人の身の上を占ひながら自分の身の上が知れぬとは如何したことでヤ賣卜者身の上知らずとハ此の事を言つたのでございませう

●第三十九譚 羊の皮を着た狼

或時狼が羊の皮を着て自分の姿を扮へ牧羊の群に入交つて羊の餌を食ひ素知らぬ顔をして居ますと牧羊者ハ夫とも知らず夕方になつたので羊を欄内へ追込み閉鎖を付けましたから狼は出る事が出来ませんスルト程經て牧羊者は翌朝の肉がないとて羊を一疋とり來て何の氣も付かず羊の皮を着て居る狼を見て此奴を甘さうだと其場で打殺してしまひました

狡猾に世を渡らうとしますと果は此狼のような禍に遇ひます

●第四十譚 野牛と山羊

獅子に追駈られた野牛が道路の曲角でちよいと獅子をはづし山羊の栖むで居る洞穴へ逃込むと山羊は腹を立て角で突出さうとするゆゑ野牛ハ小聲で「汝の勝手に吾を窘辱めなされ吾が如斯にされるのを耐忍して居るハ何も汝が畏いのでハない彼の獅子が通り過ぎて仕舞は野牛が強いハ山羊が強いハ直に判断するんだア

友人の困難に乗じて我が利益を得んとするは惡ひことです

●第四十一譚 絶壁の山羊と平地の狼

一頭の狼が峻岨な絶壁の上で草を食つて居る山羊を見付け餌食にしようと思ひましても自分が行かぬ出来ないうゑ何んでも彼の山羊を下へおろして噛殺してやらうと思ひ「ナイ山羊さん其様な處に居

て若く轉つて怪我でもして見なさい夫れさう大騒動だ此地にお前方が食物にする極好ひ草が澤山あるせといひますと山羊の上から大きな聲で「イヨ」狼さんか先づ汝のお勧めなさることは御免を蒙ろう汝が親切に言て下さるのは私等への響應でなくつて汝が自分の馳走にするのだらう

一寸來いた油断するかと云ふことがあります

●第四十二譚 老衰の獅子

或る獅子が漸々老衰して死ぬより外に望みのない身体になつても誰も介抱してくれぬものもなく苦しい氣息を喘て地上にへたばつて居ますと野猪が通りかゝり昔時の怨恨を復して呉れんと鋭い牙で突かかつて來た所へ又た野牛が來て己れも日頃の讐だと後ろから角を突込みましたすると驢馬が此様子を見て「彼の鹽梅で己れにも復

讐が出來さうだ彼れの最後に少し窘めて進りませう」と是も出て來て獅子の顔に散々に蹴亂しますと死かゝつた獅子が吼出して強者に愚痴にされるのは堪忍も出來るか汝の様を弱者に蹂躪られては乃公ア死んでも死きれねへ哩

若き時他をあやめた報ひは恐ろしいものです

●第四十三譚 海岸の旅人

二三人の旅客が海岸を通つて少し小高い岩の上に来た時沖を眺望め遙か遠方に浮んで居るのは何んでも大きな船舶に違ないと思ひ彼の船舶が港へ進入るのを見やうぢやないかと岩頭へ腰をかけ近寄るのを見ると大船ではなくて小舟の様に思われましたが益々近寄るのを能々見ますと小船でもなく一把の柴を浪が持て來て難なく濱邊へ打上げました

察者の了簡で些小いものも巨大に見えます

◎第四十四譚 羊肉を食ふ牧羊者

或狼が小屋の前を通りかゝると内で何か話聲がするので狼はソツト覗いて見ますと牧羊者が四五人寄合て羊の股を切て喰ひながら如何も甘ひ味ではないかと言つて居るので狼は此の体を見て「太い奴輩は彼奴輩が若く我を獲へたら矢張り美味など云つて食やアがるだらう

他のすることは悪い様に思はれます

◎第四十五譚 犬と生皮

飢へ疲れた犬共が河邊を歩行て居ましたが聽て製革人が河の底へ沈めて置いた生皮を見つけ彼の革には未だ少く位肉が残て居るに違ひないから食うではないかと相談を致しましたたが水の中ゆゑ出す事が

出来ないで夫じや手の届くまで水を飲乾さうぢやないかと瘦犬どもが口を揃へて水を飲初めましたたが飲でもくも飲きれません其中に腹が裂てトウ／＼残らず往生しました

無理なことに目をかけると自分の命を捨るやうな事が間々あります

◎第四十六譚 游泳をする少年

或る少年が游泳をして初めは面白さうに浮たり沈んだりして居ましたたが漸々深い處へ流れ込みアワヤ溺れやうとする處へ恰好河岸を老人が通りかゝりましたから少年は一生命懸命に聲を振り立て「何卒助けて下さいと頼みますと老人は立止つて直に助けやうともせず「何故其様危険いことをするのだ是からはオト心得たが好ひ」と長々と教訓を述べて居ますゆゑ少年は堪らなくなり「ナイ老爺助けて呉

れ教訓の後にしてサ

危急な時は口より手が肝要でございませす

●第四十七譚 家主と家犬

山中に住居で居る一家の人々が雪に降り籠められて他所へ食物を求めに行くことが出来ないので養育た羊を殺して食ひ夫でも未だ雪が降りつゞいて晴間がないゆゑ余儀なく耕牛を屠て喰ひかけますと家犬どもが其を見て相談をいじめ「サア逃げやうぢやアないか主公は平常骨を折て労働く牛でさへ殺すくらゐだから如何して我輩を免すものか

其人の親族に接待の悪い人に心は許せませせん

●第四十八譚 野猪と狐

野猪が或樹の下で牙を其幹へ摩擦して磨で居ますと其處へ狐が通りか

かりまゝして聲を掛け「ナイ猪ナヤン足下は何をして居るんダエ獵夫も獵犬も其處等に見へないで「シト危殆ことのないのに大層お働さダチー」といへば野猪は回顧して「左様さケレドモ騷動がはじまつてからは私ハ牙を磨で居る時間がないヨ外にいろく用事があるから軍を見て矢を知ぐとは昔時からの戒でございませす

●第四十九譚 獲物を獅子に奪られた狼

或る狼が牧場の欄内に入れてある羊を奪て自分の洞へ持て来る途中で生憎く獅子に邂逅せ折角掠んで来た羊を奪取れますと狼は逃出さずモウ吾の身体だけは安心ダと云ふ所まで来て「獅子ハ不埒ものダ乃公の物を取りやアがツたな」と大聲で怒鳴ますと獅子はハ、アと笑ひながら「ヘン其處で已れが考へた汝に此羊を與れた牧羊者も汝の良朋友ダナ

自分の不正ことは見ぬが他の不正ことはよく見えます

◎第五十譚 狼と羊の番犬

數多の狼どもが相談して羊の番をして居る犬どもに向ひ我輩は足下等に聞て見たいと思ふことがあるが全体足下等と形容から何から我輩に似てゐるの何故心情だけは我輩と變つてゐるだらう、さうして足下等ハ何故我輩と兄弟の様に睦敷暮となからう、考へて見ると我輩は足下等と違つてゐる所がホンの一つあるばかり我輩は人類の束縛も受けず實に自由自在に消光してゐるが足下等は人類にヘイヘイ云て匍匐屈み色々の用事を仕て遣て加之鞭で殴かれ、まだ其上に我輩の大嫌な首鐙を締められて何故足下等は何とも思はないで居るのだらう足下等ハ彼奴等の爲めに羊の番をして遣て、ううして彼奴等が、まやぶり糟の骨を貰て嬉がつて居るのは全体如何いふ了簡



第四十六譚

第四十九譚

第五十八譚

自分の不正ことは見ぬが他の不正ことはよく見ぬ

◎第五十譚 狼と羊の番犬

數多の狼どもが相談して羊の番をして居る犬どもに向ひ我輩は足下等に聞いて見たいと思ふことがあるが全体足下等も形容から何から我輩に似てゐるのに何故心情だけは我輩と變つてゐるだらう、さうして足下等へ何故我輩と兄弟の様に睦敷暮さなからう、考へて見ると我輩は足下等と違つてゐる所がホンの一つあるばかりだ我輩は人類の束縛もうけず實に自由自在に消光してゐるが足下等は人類にへいへい云て匍匐屈み色々の用事を仕て遣て加之鞭で毆かれ、まだ其上に我輩の大嫌な首鐙を籍められて何故足下等は何とも思はないで居るのだらう足下等へ彼奴等の爲めに羊の番をして遣て、ううして彼奴等が、まやぶり糟の骨を貰て嬉しがつて居るのは全体如何いふ了簡



第五十九譚

第四十六譚

第六十一譚

第四十九譚

第六十二譚

第五十八譚

めエ若く足下等が我輩の言ふことを聞入れて我輩に羊を興るなら足
 下等にも腹一杯相伴をさせて以來交情好く暮りますと云ひます
 と番犬どもは成程狼の云ふことは皆な最も多と同意して狼の洞穴の
 中へ這入りますと狼共は忽ち四方から飛かゝつて番犬を寸断くりに
 引裂き羊も食ひ盡しました

汗瀾に他の言葉は信じられないものです

◎第五十一譚 馬と騎馬武者

或る騎馬武者が戦争が始まると其飼馬に乗て戦場を馳まわり例も非
 常の軍功を立てますから實に我助力者多と考へ馬を大切に於て秣麥
 など澤山食はして愛しておきましたたがサテ世の中も穩かになり戦争
 の噂もなくありますと忽ち其飼方が悪くなり粗末なものばかり食
 へせ荒仕事のみとさせて置きますと其中に世の中が亂れ又も戦争が始

も吾れハ價值のあるものを持てるぞと云ふ意氣込で頸に着けた鈴を振鳴らし蹄音高く行きますと穀物を着けてゐる螺ハ勢ひもなくすこ〜と後から行きまゝたスルト不意に樹蔭から盜賊が顯ハれ出て刀を抜て宰領を追ちらし貨幣箱を奪ひ其螺に傷を負ハせ穀物を脊負て居る螺にハ目も呉れずに逃亡せまゝた其時傷を負ハせられた螺ハ自分の不幸を歎息あて氣息も絶へ〜に倒れて居ますと穀物を脊負てゐる螺ハ「私ハ實に瘡〜いヨ此位の騒動ハ何んでもないことダと思ひます何故と言ハ〜私ハ傷も付けられず荷物も失ひませんから寶を持て居ればこゝろ身の危いこともありません寶がなければ安心なものでございます

◎第五十四譚

鳥と羊

一羽の鳥が羊の脊に止つたため羊の面倒ながら鳥の思ひ通りにして

長時間東西南北歩行て居ましたか爾〜續かなくなつて「鳥さん若汝ハ斯なことを犬にでもしたなら彼奴ハ直に牙を出して食ひ殺すだらうに」と云ひますと鳥ハカラ〜と笑つて「ヘン巴れの誰れハ馬鹿にして構ハない誰れハ諷ハなければならあいと云ふことを知てるワイ夫れだから巴れの老年になるまで生延てるんだア

何事をするにも敵手を見るのが肝要でございます

◎第五十五譚

美男兒と醜女兒

或る人が男女一人づとの兒を持て居ましたか男の方ハ至て容姿が美しく女の方ハ至て醜うございました、其男女の兒ハ或る日母親の化粧部屋で遊んで居て不圖鏡に顔を向けましたか男の子ハ自分の容姿が美しいので自慢をしますと女の子ハ自分の容姿が醜いので憤怒を發て口論をはじめ果ハ父の膝下へ來て「父君、阿兄ハ女でもないくせ

に鏡を見て私の事を彼れ此と誹謗いひますヨ」と云ひますと父ハ「
 レサ二人とも其様に口論をしてゐるからないヨ二人とも交際よくして
 遊ぶが宜い兄ヨ汝ハ以來鏡を見たら何か悪行状をして奇麗な顔を
 汚しやしないかと氣を付けるが宜い又た妹ヨ汝ハ毎日鏡を見て何ん
 も女の徳を磨ひて容姿の醜いのを償ふ様にしたるものだと心を用ひ
 るが宜い二人とも今更阿父の言つたことを心に記めて忘れてゐたら
 ないぞ

◎第五十六譚 鼯鼠の母と子

天然から盲目の鼯鼠の子が母にむかい「阿母私ハ何んでも見分ける
 ことが出来ませヨ」と云ひますと母ハいよく見分けが出来るか如
 何だか試みて見んと見の前へ一塊の乳香を置いて「是れハ何んぞ」と尋
 ねますと見ハ「阿母是れは小石ぞ」と答へましたるで母ハ笑ひな

がら「オハ此兒ハ如何したんだらう見分がつかないばかりじやない
 嗅ぐ事も出来ないワ

◎第五十七譚 駱駝と歳神

一頭の駱駝がたましく野牛に邂逅ますと大層強さうな角を持って居る
 ので駱駝ハ嫉ましく思ひ或る日歳神の前に至り「他の獸にハ勇ま
 くも又た強氣なる角を與へ給ひしに何とて吾には與へ給はぬぞと怨
 じますと歳神ハ大に怒り給ひ「其方にハ大きな強ひ身軀を與へ置き
 たるに未だ満足の体もなく角をも與へヨなど不届至極の申條かな」
 と其望を許し給はぬのみか豫て與へ置かれた耳の一部分を取あげま
 した

前に一物を得て後に又た一物を得んとすれば前の一物も併せて
 失ふことがあります慈心ハ慎まねばなりません

◎第五十八譚

老衰の獵犬

昔時の如何な獸にも負けを取らないと云ふ強い獵犬も漸々年を経て老衰すると役に立ぬやうになり或日主人は隨て猪獵にゆき漸つと一疋の猪を駈り出しその耳に嚙付き暫時闘つて居ました。牙がくまらなないので其猪に逃げられ途方に暮て居るところへ丁度主人が駈て來て大失望をして嚴しく獵犬を責め鞭で打すへんとしますから獵犬は怨めさうに主人を見あげ「主公何卒お助け下さい故意といたしたのでございませぬ。全く私が老衰して居ますからツイ取逃したるのでございませぬ。何卒今日の過失はお怒りなさらぬで少々の昔時の辛勞を察して下さい」

軍人に養老金を賜へる等の昔時の軍功を思ふところからの事でございます。

◎第五十九譚

山羊仔と狼

屋根の上に居る山羊仔が不圖下を見下りますと狼が徐々と歩行するゆゑ散々に悪口しますと狼は立止て上を睨み「其様に吾を悪く言ふた。此卑怯なものめ何も汝が強いのはチャアあいぞ汝の居處がよいからダア」

人の威光を借りて暴をはたらくもの。此山羊仔の所作を見てナ

ト考へねばなりません

◎第六十譚

旅から歸た人の高慢

外國へ旅をして歸て來た人が旅中諸處で爲た手柄話ををしめ「サア拙者がロンドンに滞在中七八間の處を一足に跳躍だ事があります。其時は見物して居た人々が皆な感心して居ました。是れは虚説でないのです。其所には澤山の證人があります」と言つて居ます。と其話を聞て居た

一人が笑ひながら「其の實に御話の通りでございます。さういふ話説ばかりでの眞實と思はぬ人もありませうから今此處をローツと

してサア跳躍で御覽なさい
論より證據とこのことで御座ます

●第六十一譚 鹿と野葡萄

或鹿が獵夫の目を掠め野葡萄の生茂ッてる中へ隠れますと獵夫の餘り駆け過ぎて鹿の居處を通り越し其行衛を見失ひました。うここで鹿をマア〜是で事済になつたと安心して其生茂てる野葡萄の葉を食て居ますと後から來た獵夫がボリ〜と音のするに氣が付き取て返へ〜マア鹿の爰に居タナと生茂の中へ矢を射込むと鹿が其矢に中られて苦しみながら「吾が斯うなるのは當然のことだ、吾を救つて呉れた葡萄の葉を喰つたものだから

恩を受けながら其人に害をすると上帝が看過てはおきません

●第六十二譚 天帝と密蜂

密蜂がはじめて花汁を採り覺へたときうの初穂を天帝に供へんとて或る日天上に飛行し斯様珍重ものを手に入れました。至く尊神の御恩徳でござりますと慎で供へますと天帝は殊の外よろこび給ひ「是は殊勝の事ぢや此報は何なりとも汝の望みに任すべ〜」と仰に密蜂は恐る〜「嗚呼威徳赫灼の尊神何卒哀憐を垂れ給ひて此賤蜂の尾頭に一本の利劔を援け給はゞ我密汁を犯すものあるとき即坐に刺殺し申さん〜と請奉りますと天帝は殊の外人類を愛し給ふゆゑ密蜂の願を聞き大に憤怒を發し給ひて「今ま汝が請ところの如く汝の花汁を護りて人を殺すの目的にては我れゆめ〜汝の請を許すまじ去りながら今ま茲に汝に援くべき劔あり此劔は人の身體を刺すことあら

バ人に害なくかへつて汝に害ありて汝の命を即坐に終るべしよくよく慎むべしと懇ろに諭し給ひて其劍を授けられたり

◎第六十三譚 犬と秣槽

或犬が秣槽の中に臥て居るとき二三疋の馬が其秣を食へんとて其處に來かへりますと犬の寄付けしと大きな聲をして吠罵るゆゑ一疋の馬が腹を立て長ひ顔をふくらし「見る何だ此罰當り」呆犬が喰へもいなくせに吾れにまで喰せないナ

此犬の所作は世間で云ふ眞の意地悪でござります

◎第六十四譚 鶴と雁

或日鶴と雁が同じ畑より下りて餌をあとつて居ます處ろへ狩人が出て來て網にかけやうとしましたツコデ鶴は瘦せて身體が軽いゆゑ是を見ると鼓翼をして飛で逃ましたが雁は肥つて居て身體が重いゆゑ急

に逃げ去ることが出来ないので遂に狩人に捕られました

世の中の騒動ときには重いものより軽いものの方が宜うござい

ます

◎第六十五譚 猿と海豚

大洋の渡航にハ船中で興具にするため猿だノ狒狗だノを連れるのを昔日からの習慣でございしますが或人も乗船の時猿を連れて居ました然るに其船は希臘の海岸を離れて暫時すると大風になり忽ち覆没して乗組の人々ハ皆な海中へ沈ました其時或る海豚が猿の浮たり沈たりして居るを見て人かと思ひ助けてやらうと直様脊に乗せ海岸を目掛けて泳ぎ行く中やがてアデン近傍の陸が見へて來たゆゑ「貴君ハアデンの御方カナ」と尋ねますと猿は吾ハ「アデンの市府で有名るものハ子じやと答へましたツコデ海豚ハ「然らばセシヨヌを御存じ

だらうと問ひますと猿のヒノリスは有名の港と云ふことを知らず人の名だと思つたため「ハイ其人の能く私の知て居る方で私とは兄弟の様にして居る」と答へました海豚は猿の虚言を吐くのじ呆れ「汝の様な虚説を云ふ奴は隨意にするが宜い」と云ひながら猿を投出して波の底に沈みました

よく解つた虚誕を吐きますと誰でも愛相をつかいます

◎第六十六譚 牝獅子

或る時諸の獸が集會を催し各々自分の眷族の澤山なのを誇つて居ましたが孰が多いとも判然せぬ處ろから一同申合せ是から獅子のどころへ行き誰が一番多いか問ふて見やうと群獸打うろひ獅子の洞窟にゆきまづ牝獅子に向ひ「時に汝は何正お子を擧げやッた」と突然に尋ますと牝獅子は群獸を見て笑ひながら「私か私は唯ッた一疋擧

ましたばかりだがそれでも如斯雄兒でヌ

粗末な品物の多いよりの少くとも品物の好い方が所有者のためです

◎第六十七譚 蛙と鼠と鷹

或鼠が不圖したことから不幸になり畑に住居をせねばならぬことになりましたか或蛙が何時の頃よりか此鼠と怨意になり有一日「或所に汝の好物を食餌があるから其處へ一緒に参りませう」と相伴て出かけました蛙が顔に似合ぬ親切者と見ゆまゝ「若し汝が路を取違へたらんから」と自分の後足へ鼠の前足を繋ぎつけ鼠の案内をしてヒヨコリ〜と飛で行きましたか小河の邊へ参りますと俄かに惡心本心をあらわし断はりもせず水中へ飛込み鼠を引摺り込みましたから鼠は七轉八倒苦しがつて浮たり沈んだりするのを見て笑つて居

りますうち鼠はとうく水に溺れて死ましたか其死骸ハ蛙の足に繫
 がれたまゝ水のうへに浮みあがりますと天空を飛んで居た鷹がこれ
 を見つけ不意に飛下ッて鼠を攫去て一翼に飛揚りますと蛙も共に空
 に吊され同じ禍に罹りました

隣家の家を焼拂はんと火をかけて我家も類焼して同じ難儀に罹
 るハ當然のことでございます

◎第六十八譚 鹿兒と其母

或日鹿兒が鹿母にむかひ「阿母さん汝は犬よりの大きな身体で走る
 のも迅速く其上長い角がめつて如何な敵でも突倒すことが出来ます
 のに何で如彼に犬が怖いのですと問ひます」と鹿母ハ微笑ながら汝
 の云ふ通りおや私も何んで犬を恐るか自分でも解らぬが私の耳へ犬
 の吠る聲が這入ると此足が逃たがるよ



第六十七譚

第六十八譚

第六十九譚

第七十一譚

第七十二譚

第七十三譚

山羊

孔母

太子ト画獅子

蛙ノ鼠トモ

鹿兒ト鹿母

狼

りますうち鼠はどうく水に溺れて死ましたが其死骸の蛙の足に繋がれたまゝ水のうへに浮みあがりますと天空を飛んで居た鷹がこれを見つけない意に飛下つて鼠を攫去て一翼に飛ばりますと蛙も共に空に吊され同じ禍に罹りました

隣家の家を焼拂はんと火をかけて我家も類焼して同じ難儀に罹るハ當然のことです

◎第六十八譚 鹿兒と其母

或日鹿兒が鹿母にむかひ「阿母さん汝は犬よりか大きな身体で走るのも迅速く其上長い角がめつて如何な敵でも突倒すことが出来ますの何で如彼に犬が怖いのですと問ひます」と鹿母ハ微笑ながら汝の云ふ通りぢや私も何んで犬を恐るか自分でも解らぬが私の耳へ犬の吠る聲が這入ると此足が逃たがるよ



第七十一譚

第七十三譚

第七十八譚

第六十七譚

第六十八譚

第六十九譚

如何な名案でも臆病ものに勇氣を付けるは六ヶ敷話です

◎第六十九譚

鷲と狐

或る鷲と狐が何時の程にか懇意になりお互に近處に住居を志しようと云ふ相談が出来て鷲は或る大木の枝に巢を掛け狐は其根に穴を掘りて洞穴をこしらへ懇意にして居るうち狐は出産して奇麗な稚子が出来ました、うこで狐は兒に食はず餌食を探しに出ますと鷲は自分の餌食がなくあつた所から悪心を起し親狐の留守を狙ひ其住家へ下て来て其兒を攫去てムシヤク食て仕舞ひました、夫とも知らず狐が歸て見ると斯の次第也大怒りて我兒を奪られた復讐に何してやらうかと考へて居ますと折柄近所にある神社へ村の人が山羊の肉を供へましたソユデ狐は不圖思ひつき山羊の肉を少しと燈明を持て来て樹の下より火を放け鷲の兒を火熾りにして母鷲の見て居る所で食ひつ

くして仇を報へしまた
上位に居る暴君が一時人民を虐げるとも早晚人民の復讐に遇ふ
ことがあります

◎第七十譚 小兒と鳥翁と蠅

鳥翁を取て居た小兒が手に澤山鳥翁を持て居ながら不圖蠅を見付て
是れも鳥翁だと思ひ最一ツ此奴を取て遣らんと手を延ばしますと蠅
がこれを見て尾劍をふりたて「坊ちゃんサア捕へて下サイ汝が私を
捕へたら直に放させてやりませうおまけに其鳥翁までも
無事の時に兵隊を養ておくのは無益のやうでも有事ときには平
生の無益を償ひます

◎第七十一譚 狐と山羊

或る狐が溜井に落ちて上らうとしても手係りがないので如何したら

宜からうかと思案をして居るところへ山羊が通りかゝり喉が渴いて
堪らないから水を飲まんと来て見ますと狐が中に居ますから「狐さ
ん水は好う御座いますか澤山ありますか」と尋ねますと狐は自分の
苦しい容姿を隠し愉快な顔色をして「イヤー山羊さんか大變甘い水
だ何とも言へない好い水だ」と答へました、ソコで山羊は何の思慮
もなく直ぐに飛込で思ひのまゝに水を吞ますと狐は「汝と吾とが此
中に居ては場所が狭いから吾が先へ上るといやううて斯うだ汝が
前足を縁へ掛け頭を屈めて居ると吾が汝の脊へ乗て井外へ飛上るだ
らう夫から汝が上るときに吾が上から引揚げるのサ何と好い分別だ
らう」と言ひますと山羊は最のことと思ひ狐の言通りにして居ます
と狐は山羊の脊を踏臺にして井外へ飛上りましたが山羊のことは構
はないで後をも見ずに逃出したましたスルト山羊は大聲を揚げ「コ

狐さん私が上る世話を下ないかと言ひますと狐は後面を回顧き汝は愚痴な奴だなア汝が其髭の半分ほども腦を持って居たなら上る事が出来るか出来ないか飛込む前に能く見て置さうなものだ爾すれば其様難儀ありやアいないないな

第七十二譚 蜂と蛇

或る蜂が蛇の頭れどまり尾の剣でプスリと刺りますと蛇が身を震ひ如何して此敵を避けて宜いか如何して此奴を追拂つて宜いか頓と思案が出ないので死ぬ苦痛をして居ますと丁度其處へ材木を載せた車が來かつたゆゑ漸く其處までソマリ行き軌つて居る車輪の下へわざと自分の首を差入れ「エ、畜生め吾も死ぬ代りに手前も殺すぞ」自分も死ぬ覺悟なら敵を殺すの容易です

第七十三譚 乳母と狼

或る日狼が餌食を探して或家の戸口に來ますと小兒の啼てゐる聲が聞えますので耳を立て聞きますと「坊や溫柔志ないと狼に喰はせませぞ」といふ乳母の聲が聞えます狼は志めたり好餌食にありついたら窓の下に隠れて待て居ましたが早や日も暮るゝり冬のことで大分寒くなつて來ましたが棄て行のも残念とシツと辛抱して居ますと其中に又乳母の聲「坊やハ今日ハ一日溫柔かつたヨ若し狼が來たら敵を殺してやらうね」といひますので狼は吃驚して洞穴へ逃歸りますと細君の「レ、モン貴狼は大層お疲れの様子ダが今日は一日何處を歩行て居たんだエ」と問ひますと狼は吐息をつき「何故と言たら己れが或る婦人のいふ事を信用したもんだら」

口と心と違ふ人は世間を數多ありますのら言ばりりでは信用の

出来ないことがあります

◎第七十四譚 二人の旅行者と斧

愆七と強八の二人が連達て或る所へ旅をする途中で愆七は「オヤ強さん己の斧を拾つた」と云ふと強八憤怒を發て「愆七汝は愆の深い奴だ斯やつて二人で旅をして居りやア汝が拾つても二人の物だから己の斯々と言はねばなるまい、其斧は二人の物だ」と言ひますと愆七は「己が拾つたから己のだ」と争ひながら歩つて居りますと僅か道程の小半丁も行くか行かないうちに其斧の所持主が追駈けて来て「ヤイ盜賊メ何を仕やアがつた」と散々に罵りまゝたスルト愆七は大きに狼狽へ「己達の失敗だ」といふを強八の聞咎め「オツト己達と言てもらふれへせ己れと言て吳へ何故と言ひねへ汝の己れが拾つたから己れのメと言つたせやアねへか災難のかつた時はかり連坐に」

やうとばかりがふてへせ

利益のあつたとき獨りで占めやうとすると難儀のかつた時、獨りで引受けねばなりません

◎第七十五譚 老人と死神

或る薪賣の老爺が毎日荷を擔ひて市を賣て歩きましたたが有一日午過まよかゝつて一束も賣ないのでヤケを起し途中で荷を下ろし其上腰をかけて「ア、斯な苦辛思ひをするくらいなら死ぬ方がましだアア死たいものだ」と獨言を云て居ますと死神が眼の前にヒツドロドロと顯れて「私に何か用があるか死たくばサア私に隨て来い」といひますから薪賣は仰天して「マア、眞平御免下さりませ薪を脊負て今迄の通り苦勞をしめても生きて居る方が宜う御座ひます

苦しいことがあると死たいと言ふのは世間での口癖でございませ

すがサア死ぬといふと後へ引込みます斯な口癖は悪いことと
さいます

◎第七十六譚 水を飲たがる鳩

一羽の鳩が咽が渴て水を飲たいと思つて居ますと或る店の看板に水
を入れた盃の繪が畫てあるのを眞實の水と見違へ何の思慮もなく一
目散に翔飛で來ますと忽ち其看板に突當り嘴を折り翼を痛め眼を廻
して地に落ましたから通りかゝりの人の是れ好い獲物と難なく捕へ
て行きまゝ

性急なことをすると、つい仕損するものでございませう

◎第七十七譚 福神を賣る人

或る人が福神の像を造へ人に賣らうと思ひまゝたが容易買人が付か
ないところから其像を店頭へ餅立て「コレハ尊き福神で志望のまゝ

に寶物をお授け下さる福神でござい金満家になりたいたいお方は此像を
お買なさい」と大聲で効能を述べて居ますと通かゝつた或人が「ナイ
汝は何故其像をお賣りた汝の言ふ通の御利益があるなら其福神さま
を祈て福を授かる方が宜いじやないか」と云ひますと「イエ私極々
の貧乏で目下困却で居るのだから此福神さまがゆるく福をお授け
下さるのを待て居ることが出來ないので

後日の百圓より今日五十圓の道でございませう

◎第七十八譚 鼠と鼯の戦争

或時鼠と鼯が戦争を致ましたが幾度戦つても鼯が勝利で鼠が敗軍と
なりまゝたそこで、鼠共が考へますに斯屢々敗軍になるのは進退の
命令をする指揮官がないからだ先づ其の指揮官を擇ぶが宜からうと
其の中の智者と呼ばるゝ老鼠を選んで衆鼠の進退を任せると致

しまいたソコテ今度でテハ、劍軍を微塵に破らねばならぬと早速劍の方へ開戦のことを言ひ送り大將は成丈け立派の装飾をして彼れが鼠の大將だと敵にも見分るやうにするが宜からうとの事で立派に打扮悠々と押出しましたソコテ双方入亂れて戦ひますと今度も鼠方が大敗此で衆鼠は我れ一と穴の内へ逃込み大將鼠も最早叶はじと穴の内へ駆け込まうと去ますと身体中の飾りが邪魔になつて狼狽て居るところをトウク生捕にされました

◎第七十九譚 獅子王の管轄

或地方にて諸獸の王と敬めらるゝ獅子王に至つて温良く領内に仁政を施しますので諸獸は何れも歸腹して居りましたヌルト王ハ一日布告を出しまして諸獸のこらす出應のうへ永久互ひに親睦すべとの盟約を爲せよとの事でございますから狼も子羊も豹も山羊仔も虎も鹿も犬も兎も出頭して其約束を致しました其時兎は殊の外大喜悦で「私共は如何して如斯嬉しい難有い御代に主れましたたら私共の様な弱いものでも強ひもの、傍に居ても少くも恐怖いことのないとは

弱い者も強い者も權利を平等です

◎第八十譚 太子と畫獅子

或る國の王が武事の演習を好き給へる一人の太子をもち給ひしが或る夜の夢に此太子が獅子に喰はれ給ふと見て夢の覺ましたソコテ王は夢の眞實を証するものなればと殊の外御氣に掛けさせられ此うへの太子の外出を止るの外なくと新たに美麗なる離宮を建てさせ給ひて御慰のためあらゆる動物の繪を四方の壁に畫かせられ太子を此離宮に閉籠めおかれました、ヌルト御年若き太子は離宮のうちを

と物憂き時日を送り給ひ壁間に畫きたる獅子に子圖御眼を着けられこれに向ひて「オ、獅子ヨ汝ハ憎き奴かな汝は我父君の御夢に入り我を喰うと見せまいらせしゆゑ慈悲深き我父君ハ我を婦女子の様に此宮殿に閉込め給ひしを如何して呉るか見て居よ」と此畫獅子を歎んとて薔薇の枝を折取らんと仕給ふ折り御指を其刺にさし給ひ痛み甚だしく夫より床に臥き給ひしが遂に破傷風の症となり幾日も經ぬうち此世を棄去れまうた

◎第八十一譚 母猿と子猿

或る猿が双兒を生み其一正の子猿を至て寵愛するに引換へ今ま一正の子猿を大層に憎まうたヌルト其寵愛した方ハやがて病氣に冒され程なく死せまうた其惡まれて居た方は養育法が惡いのに還て健かに生長しまうた

何事でも餘り精神を費ひ過ますと失敗ることがございます

◎第八十二譚 生擒に遭ふた鷲

不幸な鷲が或る人に生擒られ其羽翼を切られて園内に遊んで居る家禽の群中へ放されまうた鷲ハ從來の通り羽翼をのばして天空を飛ぶこともならず羽翼の弱ひ下鷄の類と日月を送るのを悲しく思つて居ますと其近隣の人が此鷲を譲受け日々養育して從來の通り空中を翔迴やうにして放してやりまうた鷲ハ大層悦びまうてやがて一羽の兎を捕て恩人に贈りますと或る狐がこれを見て「其様に羽翼を延ばして呉れた人に兎なんぞを與るくらいなら汝が以前の主人に恩を報すが宜いさうすると復た汝を生擒にして汝の羽翼を剪み取るだらうから

◎第八十三譚 農夫と狐

或る農夫が度々自分の飼鶏を狐に奪取まそので何んでも彼奴を捕らへて復讐をしてやらんと思ひとうく其狐を生禽にしましたから麻屑を油に浸して尻尾に結付け火の燃へて居る中へ追放しますと狐は苦辛まされ其農夫の所有畑へ飛込み散々に荒れまわりました時節へ丁度小麥の收穫時狐に荒されたため收額は見込んで居た半分にも足りませんでした

復讐も反討と云ふことが度々あります

◎第八十四譚 獵夫と樵夫

或る武士が一日獅子獵をして見たいと出かけ漸々深山に入込む途途中で樵夫に行遇ひました其處で武士の宛も威猛に「ヨリヤ、汝は獅子の歩行の跡を見や、志ないが獅子の洞穴を知つて居るか知て居るなら教へろ」己れが獅子を生擒して見せやうと言ひますと樵

夫の腰をかいて「へい、尊公、私と相伴にお出でなされは獅子をお見申ませう」と去りますと武士は急に顔色が變はり身体を震はしあがら「夫れはマアかたじけない志か、私ハ獅子の痕跡を探して居るので獅子を獵るのではない、何んでも實際にみると人の腹中が解ります

◎第八十五譚 橄欖樹と無花果樹

橄欖の樹が近處の無花果樹にむかひ「ナイ無花さん、已達は秋が來ても冬になつても此通り緑々として居て何時も色合の變ると云ふことはあいが汝の葉の色は緑い時があるかと思ふと又た赤色になつたり少く風が吹くと散て仕舞ふが一向心の解らないお方じやなア」と嘲笑ひますと無花果樹は何の返答もせず居ました或る時大雪が降て來て橄欖の葉に積めて其重量でドウ、枝が折ましたソ、無花

果樹ハ橄欖の樹にむかひ「何です雪が降ると御難儀でせう私ハ此様
時の用意ハ寒さに向ふと葉を振ふのです

◎第八十六譚 二個の過失囊

或る古語に「人は誰でも二個の囊を首に掛けて生れます」といふこと
があります其囊は何か入れてあるかと聞いて見ますと一個の方に
は近鄰の人々の過失が入れてあつて夫を頸の前にかけ又た一個の方
には自分の過失が入れてあつて其を頸の後に掛けて居るのです夫だ
から近鄰の人の過失は能く見えますが自己の過失は見えませんが
人の過失を彼此評判するよりハ自分で過失のあいやうに注意る
のが肝要でございませす

◎第八十七譚 蝮蛇と鐘

或る時蝮蛇が鍛冶の店にのたくりこみ其處にある諸道具に向ひ「何



果樹への橄欖の樹にむかひ「何です雪が降ると御難儀でせう私に此様
時の用意は寒さに向ふと葉を振ふのです

◎第八十六譚 二個の過失囊

或る古語に「人は誰でも二個の囊を首に掛けて生れます」といふこと
があります。其囊は何か入れてあるかと聞いて見ますと一個の方
は近鄰の人々の過失が入れてあつて夫を頸の前にかけ又た一個の方
には自分の過失が入れてあつて其を頸の後に掛けて居るのです。夫
から近鄰の人の過失は能く見えますが自己の過失は見えません。
人の過失を彼此評判するより、自分で過失のあいやうに注意
のが肝要で、ございます。

◎第八十七譚 蝮蛇と鑢

或る時蝮蛇が鍛冶の店にのたくりこみ其處にある諸道具に向ひ「何



第九十九譚

第八十七譚

第一百九譚

第九十二譚

第一百十譚

第九十五譚

か食物を與て下さらぬか」と頼んでも誰も返事をしませんが、誰か
 むかひ別段に其由を頼みますと、鐘は「汝は餘程馬鹿なお方々他の者
 は摺り取つても他には何も與らない私に其様ことを頼みなさるから

◎第八十八譚 金満家と柔皮商

或る金満家が或る柔皮商の近處に轉宅して來ますと柔皮の息氣が
 て我慢にも居られませんソユテ金満家の黄金の威光で柔皮商へ轉居
 を頼みますと柔皮商「イヤ明日はイヤ明日はと追々轉宅を延引
 して月日を送る中金満家「いつか其臭氣に馴れて其催促をい
 うにかりました

習慣は第二の天性と申すのは此處でございませす

◎第八十九譚 犬と兎

或る獵犬が小山の近邊で兎を捕へ已に食殺さうと致し、たがイヤ

おやと思ひ直し又友達と遊んで居るやうに兎は詔諛を始めました。うこで兎は「何卒ワンさん汝の本心をあらはしては貰はれませんか。汝は私の朋友かと思ふは又敵のやうにも見え如何も汝の眞心が解りませぬ。」

◎第九十譚

野牛と女獅子と猪獵夫

或る野牛が獅子の兒の寝て居るのを見付け角で衝殺しますと女獅子が駈けて来て「ア、不憫なことをした私の兒は野牛めの角で衝殺された」と歎息して居ますと其處を通りかゝつた猪獵夫が女獅子の悲んで居るのを見て少し距離た所から「ナイ、女獅子殿汝の爲めに兒を殺されて悲んで居る人が世間には幾許あるか好く考へて見な。人を奪殺す猛獸でも我子を失ふと悲しいものを見なす。」

◎第九十一譚

駱駝

人が初めて駱駝を見た時に大きな形體をしてゐるから驚いて逃げました。が暫時すると駱駝の性質の溫柔いと云ふことが了解して近寄るやうなことが何とも思はないやうになると又た此動物へ精神は不具いところがあると云ふを知りましたのでサア人類は馬鹿にして其口へ手綱を付て小兒に追はせるやうにかりました。口を付て人へも身體が大きいからと云て恐れるには及びませぬ。◎第九十二譚 猫と鶏 或る猫が鶏を捕て「此奴を食ふにも何が道理を付て遣りたいと思案を志して汝は毎朝早くから奴鳴り立て、人の眠りを覺すから人間の防害をする奴ダナ」と責めますと鶏は「イエ、其れは貴君のお言詞とも思はれぬせん私が毎朝早くから鳴きますは、お人々が朝寢を志ないで皆な寝れ、仕事に掛り人間の爲めに少しも防害になら

ないで巨大な利益になります」と答へますと猫へ「假令汝が都合の好い辨解をしても己の食はずに居られないぞ」と到頭食つて仕舞ひました

人間にも此の猫のやうな奴が間々あります

●第九十三譚 蟹と狐

或る蟹が住み慣れた濱邊を見捨て、其近邊の牧場へ這込み此處を己の居住に定めやうと尻を据へて居ますと狐が来てツイソ見慣れない小さな奴が饑たる時に食を擇ばずたドレ食てやらうかと口を出しますと蟹の哀れな聲で「私が斯うなるのは當然だ私の性質と云ひ習慣と云ひ海邊に居る譯だのに如何な用事があつて陸に住はうといふ氣になつたか自分でも解らない

何事も天運に任せて満足してゐれば幸福を得るものです

●第九十四譚 二正の蛙

二正の蛙が近處同士の住居でありましたが都合があつて一正は人目にかゝらぬ片田舎の深い池に住替をなす一正の方は相變らず水も充分にない大道を横切つた小溝に住居をいたしましたが其住替をした蛙が「汝も私の居る池へ御出なさい夫はく人の目に付く憂もな食物も澤山あるから誠に安心です斯か小溝に居ては如何な災難があるかも知れませんか」と意見をしますと「御親切は難有道理だが如何も住なれた所は動き憎いものです」と折角の意見に従きませんでした其後二三日経つと大きな荷車が小溝のうへを通越し其蛙は輪に敷れて死ました

頑固なもの、害に遭ふのは自分から求めるのです

●第九十五譚 羊牧者と狼

羊を飼てある牧場の近邊に永らく徘徊て居た狼がありました。羊に目をかけるやうな様子もなく至て正直ものゝやうに見えましたが、牧羊者は油断せず此方の敵だと思つて注意て居ました。此狼が此邊を徘徊出してから最早日數も多く過ちますので羊の朋友のやうになり敵と思つたのは此方の僻心かと思ふほどになりました。ソコデー日牧羊者は何か用事が出来て市街へ行かねばならぬことになりました。此狼に羊の守護を頼んで出かけ、やがて歸て見ると羊は大半取殺されて居たので牧羊者は大きに驚き「ア、己の愚な男だ何故狼に羊の守護を頼んだか知らん

極く親友の交際をして中には敵のやうな心を持って居る人があります。

◎第九十六譚

腹と支躰

或る時支躰目口鼻耳共が集會を開きまゝして我々は腹の飢らないやうに日夜働いて居るが腹は我々が仕送り食物を食うのみで、謝儀の一ツも仕様とはせず好い氣になつて贅澤をきめてゐるから懲めの爲め今日限り働を止めて腹の乾わがるやうにして遣らうと評議を極ました。ソコデー足は一步も歩行す目ハ物を見やうともせず手は箸を取らうともせず口も齒も鼻も耳も皆な怠惰て居ました。サテ夫から二三日經ち腹が飢渴て來ると四肢五管が皆な衰弱したところから「ア、我々が從來働いて居たのは何も腹の爲めばかりじゃアなかつた矢張り我々の爲めだナア」と始めて四肢五管が後悔をいたしました。

◎第九十七譚

鴉と蛇

或鴉が空腹になつて何か食物はないかと樹の枝から下をながめますと日向に蟠まつてスヤ／＼眠て居る蛇が居りますので直ぐと飛下

りて攫去はうとまますと蛇の眼を覺し「誰れだ己れを喫驚させたの
の」と言ひながら突然鴉に卷着てキリキリと締つけましたから鴉は
氣息も絶へぐに苦しい聲を出して「吾は生るためにお前を食はう
としたのは是が死ぬ基となつたか私ほど不幸なものはない

暑中あどに咽喉が渴て來るとガブグブ水を呑む見達があります
が一時の渴を止めても夫が病氣の基因になることがありますか
ら用心をせねばなりません

●第九十八譚 猫と愛神

或る猫が或る美男子に戀慕して何卒して彼の人の嫁になりたいと思つ
て愛神に願を掛け「私は猫の形態でございしますが少く望みの筋がで
ざいますゆゑ何卒婦人の形態にお替へ下さりませ」と願ますと愛神
早速猫の願ひを許し美しい婦人の容姿に變られました、さうすると

兼て戀慕をかけて居る美男子の方からも戀想して婚姻の相談もまど
まり思ひのまゝに夫婦になりました、うこで愛神が熟くと此花嫁の
有様を御覽になりますと少くも猫の素振はなく何見ても人間でござ
いますから其食物も替つたか如何だか試して見んと鼠一疋を部屋の中
へ追込まれますと此花嫁の忽ち猫の性質をあらわし其鼠を捕り食
はんと追駆けました、うこで愛神の形容ばかり人間でも心が變らな
いでは無益だと復た元來の猫になされました

●第九十九譚 鷹と鳶と鳩

或る堂宇の屋根に住居をして居る鳩共が鳶の威勢に怖れ鷹にむかひ
「彼の鳶めは恐ろしい鳥ですから若く彼奴等が私共を苛虐める様な
ことがありましたら何卒御加勢を頼みます」と言ひますと鷹は早速

承知し、まゝした、ところで鳩共は皆々大喜悦て自分共の部屋へ鷹を案内しますと、鷹が一年中に捕殺すよりも多くの鳩を一日に捕殺し、まゝ

◎第一百譚

牝鶏と燕子

牝鶏が蝮蛇の卵と知らず暖めて居りますと蝮蛇の子が孵へり、まゝした其時燕子が牝鶏の所爲を見て「汝ハマア何んど馬鹿なお方ぢやないか如斯く蝮蛇の卵を孵して此奴等が生長なると最初に汝を喰殺すのだ

世には此牝鶏のやうな不便の人が間々あります

◎第一百一譚

盜賊と鶏

盜賊が或る家へ忍び入り、まゝして何か價値のある品物はないかと探して見ると是と云ふものはなく、鶏が時の隅に蹲踞つて居るのを見て「

エー貧乏な家だなア先是れでも掠つて行かうかと鶏を盗んで我家へ歸り腹が飢て來た此鶏でも食はうかと絞殺にかゝると鶏ハ「私は人間の爲めには益になるものでございませう私ハ早くから人を起して仕事をさせ人よ金儲けをさせませう」と言ひ、まゝと盜賊は「うれだから己れが汝を殺すのだ汝が人の目を覺すと己れは仕事を止めねばならぬから

善事をするものゝ防禦になるものゝ惡事をするものゝ爲めにハ敵でございませう

◎第一百二譚

乘馬と驢馬

或る驢馬が重貨を脊負ふて蹇と歩行いて居りますと一頭の乘馬が華麗な馬具をつけて駿と遣て來て「ヤイ邪良になるはハ脇へよれ、ぐずぐずせると此蹄で蹴殺すぞ」と奴鳴つけ、まゝした驢馬ハ何の返事もせ

ず脇へよけて馬を通し、まゝたがサテ其後軍でもあつたものか此乗馬
 へ重傷を受け不具になつて農家へ賣つけられ重い荷車を挽て来るを
 件の驢馬が見て何でも彼馬の見たことがあるとつくづく考へ「サウ
 ぞ彼馬へ先頃已を怒鳴つけた奴だオイ」高慢者め日外のやうに威張
 れるなら威張つて見ぬへ其の見苦しい風体を見ても已はれ氣の毒と
 へ思はねへヨ

榮枯盛衰はをかられぬものでございませう

◎第百三譚 旅人と運命の女神

或る旅人が長途をして疲勞が出て一休息をやうと或る井戸の邊の小
 石の上へ腰をかけツイ浮々ど仮睡をまゝたが一つ寢返りを打てば井戸
 の中へ陥込ふと云ふ危険ところで運命を守る女神が顯はれ「旅人ヨ
 眼を醒ささいか起ろ」若く汝が此井戸の中へ陥込むと人類社

會で我の守護が足りないとか何とか言て我を悪く言ふだらう全体
 人の我儘なもので難儀なことがあると自分の不注意の棚へ上げて皆
 な吾の罪だと思つて居るから

人の幸福と不幸福との孰らも自分で招くのでございませう

◎第百四譚 二疋の蛙の移住

或る二疋の蛙が小さな池に合宿をして居ました夏が早魃で水が悉
 皆涸りましたため互相談をして他へ移轉の支度を調へ出かけた途中で
 古井戸を見付け一疋の蛙が内を覗きこみ「コレハ如何にも好さうな
 井戸だ水も食物も澤山ありさうに見ゆるこれを御同様の住居にしま
 せう」といへば友蛙へ用心をして「若く此水が悪かつた時に如何な
 ざる如斯深いところから復た出ることハ出来なせ

何でも理非善惡の見とぼしが付かないうち先くみぬ方が勝

利でございます

◎第百五譚 鹿と羊と狼

或時鹿が羊にむかひ「羊さん何んど憚りだが麥を一升借して下さるまいか最も其証獸に狼どのを頼みますから」といふと羊は若く誰かられの志あいかと暫時考へ「狼は何んでも物の要るときは構はず他の物を攫去て行く癖があるテ又た足下ハ競走をするに脚が長いから中々我ハ及びません而みると返濟の期限が來ても本獸も証獸も我の手にハのらないテ

黒いものが二ツ集つたのでハ白いものになりませぬ

◎第百六譚 猫と鳥

或る鳥が病氣に罹つて鳥檻に惱んで居ますと或る猫が醫師の衣服を着て杖を携へ治療具箱を小猫よ持せ鳥檻へ遣て來て病鳥の同居鳥に

むかひ「貴君ハ蘇ぞ御心配で御座らう誰れか好い醫師にでもお見えなすつたか、なんなら私が藥の御指揮をして直に治療してあげませう決して御遠慮に及びません」と言ひますと同居の鳥ハ「誠に御親切の段ハ難有う御座います、志か私共をはじめ病鳥ハ如何しても貴君の御構ひ下さらぬのが最大好う御座います

我方の不幸ハ敵の幸福でございます

◎第百七譚 雀と兎

或る時兎が驚に攫まれて苦しまぎれに泣出しますと傍に居た雀が兎を馬鹿にして「兎殿汝の足ハ日頃快走といふことだが斯な時にハ遅いものだナア」と笑つて居ました迂濶して居る隙を窺ひ不意に鷹が來て此の雀を攫みました其時兎ハ驚の鋭爪を逃れ一命を拾つて大息を吐きながら「私の難儀な目に遭て居るのを見て雀踊をして喜

んで居たから自分も其様難儀な目に遭ふの、當然の理デア、人の憂を悦びますと人もまた我の憂を悦びますから人の憂、我が憂と思ねばなりません

◎第百八譚 敵同士の人

敵同士の人が或る時同船をしますと双方とも傍に居ていならぬと一人の船尾の方へ一人の船首の方へ坐りました、そこで船が海岸を離れて大洋へ出ますと生憎颶風が吹て来て今にも船が覆へりさうになりますと船尾に居る一人が水夫にむかひ「なんと船今にも沈没さうだが船首と船尾の孰が先きたらう」と尋ねますと水夫「私の考へだと先ア船首の方が先きたらう」と答へました、スルト船尾に居る人の嬉しうな顔つきで「左様ですか夫れならば私の死んでも悲くありません敵の死ぬのを見て居ることが出来ますから」

敵同士の心の恐ろしいものでございます

◎第百九譚 食牛と屠丁

或る時食牛共が集會を催けて「我々を殺すのは彼の屠丁共だから彼奴等を残らず殺してやらうでないか」と相談をつけ何時何日といふ定めの日にありますと數多の牛が角を研すまゝ出て來ました其時永らく田畑に遣はれた百性牛が「成程我々を殺すのは彼の屠丁めに違いない志か、彼奴等へ我々を手際に殺ろして呉れるから死ぬにも苦痛をしないが今ま彼奴等を殺して仕舞ふと又た下手な屠丁の手に掛らねばならぬさうすると二重死をする苦痛に遭ふせ假令屠丁が居ないからッて人が食牛を食はずに居ないから」

◎第百十譚 暴犬

或る人が飼て居る犬は世に云ふ暴犬でございまして誰でも彼でも行

當り次第囓付きますから主人ハ其頸環へ鈴をつけ人が用心をするやうにして置ますと此暴犬は鈴を付けられたのを自慢らしくがらく鳴らして街中を威張ツて歩きましたすると年老た獵犬が「何故汝は斯んなものを人に見せ歩行て居るのダ汝は是れを賞牌ダと思つて居るか知らないが私の考へでは汝が暴犬だから各人に除けろと云ふ標につけた耻辱牌だぜ

世間には耻辱になることを名譽の様に考へて居る人が随分多くあります

◎第百十一譚 旅人と犬

或る人が旅行をせんとて其準備に忙しかつて居りますと戸口が愛犬がボンヤリとして立て居るを見て「汝は何んで欠伸して居るのだ準備の出来ないのハ汝ばかりだぞ」と言ふと愛犬は尾を掉りながら私

は最前から準備が出来て主公を待て居ますのダ

遅緩した人が動もすると敏捷い人の延引を責めます

◎策百十二譚 牝鹿と獅子

獵師に追駆けられた牡鹿が命からかく洞穴へ逃げ込みますと是れは獅子の住居でありましたが獅子は牝鹿を見ぬ風体をして小隅に潜んで居ましたので牝鹿は少しも氣が付かず「ヤレ」是で安心ダと腰をすへて息休みをした末徐々に出かけますと獅子は時分を圖り後ろから飛かゝり「是れシメバタするあへ」牝鹿ハ仰天して震へあがらう私は何した果痴だらう漸々獵夫を逃れたと思つたら又た恐ろしい獸の住居へ飛込んで居た

小害を避けんとて大害を受ける事がありますよく注意ねばなりません

◎第一百十三譚

驢馬と牧者

或日驢馬が牧場で草を食つて居ますと牧者は其番をして大屈さうに四方をながめて居るうち俄然鬨聲が起つて敵が攻寄せるやうすゆゑ牧者は喫驚して「サア逃るのだぞ」と思ふと我も汝も敵の囚俘になるぞ」と言ひますと驢馬は緩慢な風体で「旦那何故私も逃げなければならぬのです主公は敵が私を奪つたら從來より二倍の荷物でも負はされはままいかと夫を案じて下さるのか」と奇妙なる返事をなから牧者もナと言ひ方に困り「ナニさうでもないのサ」と能加減の返答をしますと驢馬は沈着切て「夫れじやア私は相當の荷物を負うとさへ思つて居れば誰れに使はれても差支へありません

◎第一百十四譚

禿頭翁と蠅

一定の蠅が禿頭翁の頭にとまりナヨイと嘗一嘗試ると翁は手を舉げ

て「イヤリと敲きまゝ」其時蠅の敏捷く手の下を潜りぬけて耳の端にどまり「旦那此處ですや貴君は私のやうな小さい虫がナヨイと嘗めて試たのに憤怒を發て私を殺さうとまで思つて自分で自分の頭をビヤリとやらかして痛い思ひをなされるとはハテ如何したもので御座います」と冷笑しますと翁は益々「焦燥ち」イヤ乃公の頭と乃公の手は容易に和睦が出来るワイ何故と言は、頭に痛い思ひをさせやうと思つて敵たのではないから、まか一人の體を嘗めて歡んで居るやうな賤ひ穢ない蟲は假令頭に如何様な重い罰が來ても殺してやるのが乃公の本望だ

敵を殺さうとするものは幾分は自分にも害を受ける覺悟でござります

◎第一百十五譚 醫師に化した補鞋匠

或る補鞋匠が日々労働して居ても思ふやうに錢の取れぬところから自分の顔を知つたものゝない市街に往き藥劑の調合をはじめ醫師を氣取つて是れの中毒に莫大の効驗がある解毒劑だと言つて或る藥を賣つて一時は大評判を博まつたが此補鞋匠が程なく重病に罹つて臥床ますと兼て此市街の支配人は此奴は何のくらゐ醫術に巧者だか試して見んと思つて居たところゆゑ一日尋ねて來て容体を問ひ素知らぬ風体にて茶碗に一杯水を入れ是れは補鞋匠の調合した解毒劑と毒とを交混たものぢやが之を飲たら褒美を出しませうとて飲ませじかゝりますと補鞋匠の命に換はれないと思ひ「私は醫道は少しも存じませんが痴呆な人々が私の事を色々と評判して高名あつたのでございませう」と自首をしますと支配人はやがて市會を開て「市民ども名の付た汝達にはマア如何して斯な愚痴なことが出來ます足部に穿く靴の

補綴もせない人に汝達の大切な頭部を任すとは馬鹿にも程のあつた事だ

◎第百十六譚 獵師と騎馬武者

或る獵師が一羽の兎を捕て肩にかけ歸て來る途中で騎馬武者に出會ますと其武者は獵師に向ひ「拙者は其兎を買いたいが無理ながら何卒譲つて呉まいか」と言ひますと獵師は「お好なら賣りませう」と差出すを武者の受取るや否や價を拂はずに駈出しました、そこで獵師は逃がしてなるものかと一目散に追駈しましたが一丁後れ二丁後れて最早追付く目的がなくなりますと「オーイ、武者殿、御待下され其兎の貴下へ進上致しますから」

◎第百十七譚 犬と獅子の皮と狐

數疋の犬が獅子の皮一枚を奪合て宛も強さうに牙で散々に噛裂て居

たところへ通りかゝつた狐がこれを見て「若し此獅子が生て居たらば汝方の牙より獅子の爪の方が餘程強いといふことを直に見せられるだらうのに」

下へ居る人を蹴るは易いことぞございます

◎第一百八譚 驢馬と狼

或る驢馬が牧場で草を食つて居ますと狼の來るのを見て彼奴が己を捕うと思つて居るナ一次彼奴を騙して遣らんと跛足の眞似をして居ますと狼は「驢馬さん汝は如何して跛足よおなりだへ」と尋ねましたも此驢馬は不自由な風体をして「ハイ狼さんか私ハ此頃生垣の間を通らうとして足の裏に刺をたて、困つて居ます御覽じて引抜いて下さりませぬか」と足を出ますと狼は得たりと驢馬の片足を持あげ蹄の裏を覗き込む隙を見て驢馬は爰ぞと狼の面をつゞけさまよ蹴ち

第一百八譚

第一百二十一譚

第一百二十五譚

驢馬と狼



牧牛者と牛仔



馬と狐



戦馬と驢馬



第一百二十六譚

醫師はなつた蝦蟇



赤禿頭ノ武士



たどころへ通りかゝつた狐がこれを見て「若し此獅子が生て居たらば汝方の牙より獅子の爪の方が餘程強いといふことを直に見せられるだらうのに」

下居る人を蹴るは易いことぞいいます

◎第一百十八譚 驢馬と狼

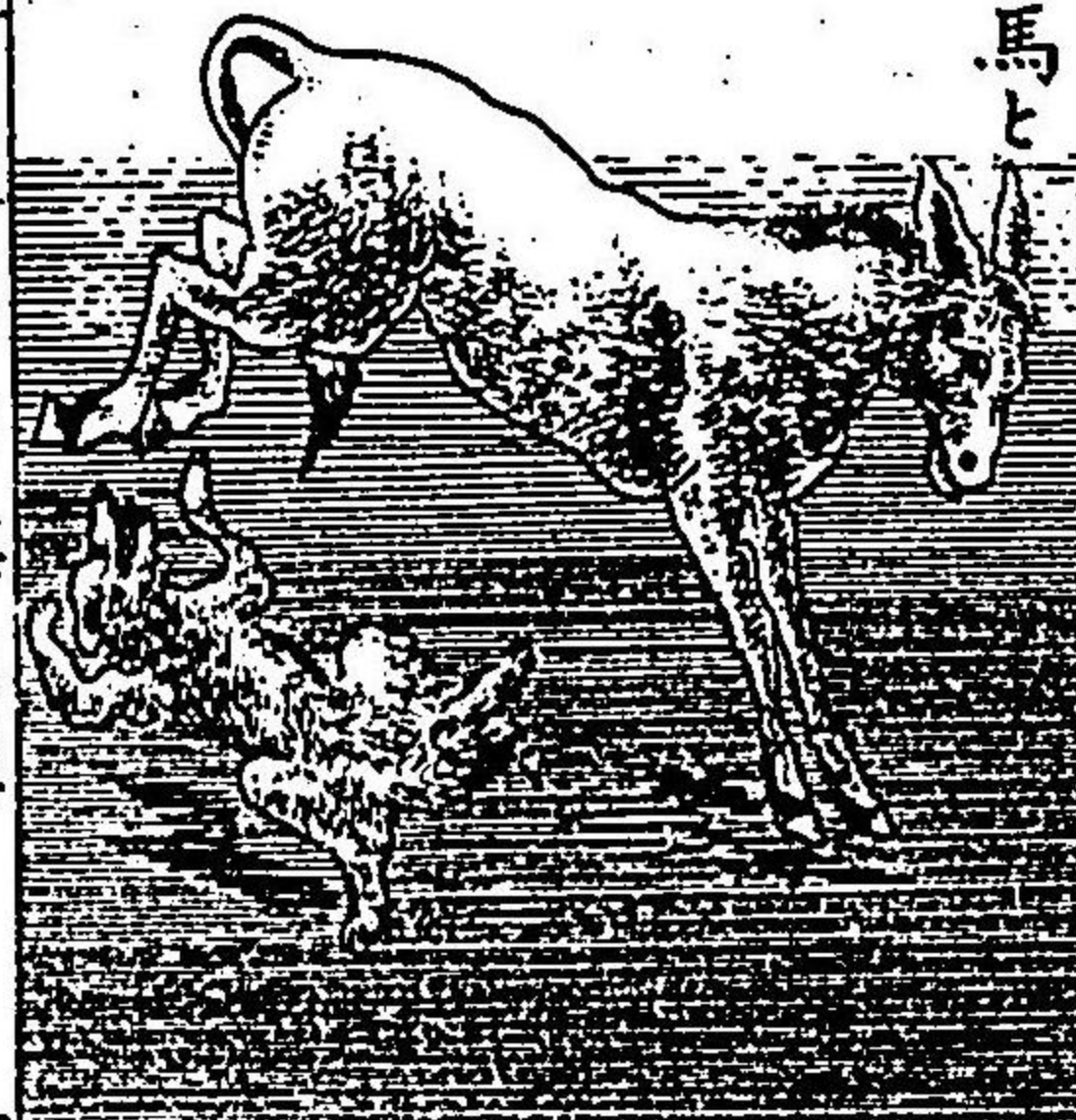
或る驢馬が牧場で草を食つて居ますと狼の來るのを見て彼奴が己を捕うと思つて居るナ一次彼奴を騙して遣らんと跛足の眞似をして居ますと狼は「驢馬さん汝は如何して跛足よおなりだ」と尋ねましたも老驢馬は不自由な風体をして「ハイ狼さんか私ハ此頃生墻の間を通らうとして足の裏に刺をたて、困つて居ます御覽じて引抜いて下さりませぬか」と足を出ますと狼は得たりと驢馬の片足を持ちあげ蹄の裏を覗き込む隙を見て驢馬は爰ぞと狼の面をつゞけさまよ蹴ち

第一百十八譚

第一百二十一譚

第一百二十五譚

驢馬と狼



牧牛者と牛仔



鴉と狐



驢馬と戦馬



第一百二十六譚

醫師はなつた蝦蟇



第一百二十九譚

赤禿頭ノ武士



第一百四十七譚

「何處いづともなく逃去にげりました其時そのとき狼おおかみの歎息なげきしてニア、已おれが如斯かめに遭ふあの當然あたの事ことが已おれの親父おやぢは已おれに屠者ほろりての營業なりわいを教おへてくれたのに醫者いしやの眞似まねをしたから

◎第百十九譚 蚊と獅子

蚊かがブシ〜言いひながら獅子ししの居る所ところへ来て「私は汝おまえを些少すこも恐おそれないぞ汝おまえよりか私わたしの方が強つよいぞ汝おまえの強つよいのは乙女おとめの喧嘩けんかをするやうに爪つめで引搔ひひたり齒はで嚙か付つたりするばかりだ切々せき言いふ様ようだが私わたしは汝おまえより餘程よほど強つよい其そのが虚言うそなら孰どうが勝かつかサア決闘けつとんをして見みやう」と云いひますと獅子ししは咆哮うなりり出でてサア來こいと云いふや否いなや蚊かは嘴角くちかくを尖とらせて獅子ししの鼻はなの穴あなや顔かほの毛けのなるところを散々さんざんに刺さしました、獅子ししはいよく猛たけり出でて蚊かを一撃いっせきに打取うちとらんと我われと我身わがみを搔裂かきて自分で創傷てきさを受け閉口へいこうして引込ひみますと蚊かは獅子ししに勝かたと云いふので凱聲かゐを

あげて引上げました其後間もなく蜘蛛の網にかゝり苦もなく餌食
になりました其時蚊は歎息して「ア、吾れの獅子ほどの豪敵と引組
んでも敗北はとらなかつたが蟲のうちでも下賤な蜘蛛に殺さるゝと
はナエ、残念

大敵を見て恐れぬものへ小敵を見ても侮りません

◎第二百二十譚 牝山羊と狼

牝山羊が何の用心もなく牧場から出て来ますと途中で狼に邂逅ひ追
詰められて途途を失ひ詮方なく狼に向ひ御身に出會ひ「妾の不運最
早餌食となるより外に術も候はず就て今は此の際に唯だ一事の願ひ
聞入れてたび給へ妾幼き時より舞を好み、いかで、此世の思出よ一
曲舞はせて給はらずや御身の笛に秀で給ふかかねく聞知りはべる
か」妾が拙き舞に合せ二曲聞給はらば此うへのことや候ふべき

と愁きますと狼も「其は面白らん我も笛の名人なれば」と笛を吹き
出しますと俄に騒がしくなつたので獵犬は何事かと思ひソソク來
て見ると狼が居りましたのでイヤナリ飛かゝる狼の不意を打れ吃驚
して逃出し聴てふりかへりて牝山羊をにらみながら「ア、吾れは斯
なことになる筈じや業体を餘所にして笛なんぞを吹て汝を面白がら
せたから

◎第二百二十一譚 牧牛者と牛仔

或る牧牛者が牛仔を失つて其行衛が見當りませんので山の神や土地
の神に願をかけ「若し牛仔の盜賊を見付ることが出来ましたら御禮
に羊一疋を奉備ませう」と誓を立て其處彼處と尋ねて小山の片端へ
上りますと牛仔を食つて居る獅子が居たので膽を潰し戦栗をしながら
ら上天を仰ぎ「山の神様土地の神様此災難を救はせ給へ御禮には彼

の牛仔と野牛の大きなのを供へます

◎第二百二十二譚

兎と獅子

或る時諸獸が會議をはじめ兎が一番起立して宛も大議論らしく一諸君ヨ何んでも世の中は尊卑大小強弱の差別なく權利を平均しなればなりませぬ余の説の如きは萬國の公法とも申すべきもので諸君に於ても御同意御同感と云ふことハ余が自ら信じて疑はざる所で御座います」と喋々と述べますと獅子が突然起立して會場も動くばかりの聲を出し「只今兎殿の述べられた説は一應御最と存じます、まかり各位諸君は拙者の如き爪と牙を御持ちあさるか承はり度

◎第二百二十三譚

驢馬と騾

或る驢丁が騾と驢馬に荷物を着て旅をしますと驢馬の平地の間は何の苦もあらず歩きますが山路へ掛りますと荷物の重みが二層倍もある

やうに思はれ脚が進みませんソコで驢馬ハ思案して「何と騾太郎さん己れの荷を少し助けて下さるまいか己にハ歩けなくなつたヨ」と泣聲を出して頼みますが騾ハ更ハ頓着もせず駈々と行きますうち驢馬はトウ／＼荷物の下敷にあつて斃れまゝた、ソコで騾丁ハ詮方なく其場で驢馬の皮を剥ぎ荷物と皮を残らず騾に脊負せまゝたから二頭分の重荷となり騾ハまきりに歎息して「ア、己が悪かつた先刻驢右衛門が少し荷物を助けて呉れと言つた時サインレと受取て遣たら二疋前の荷物ばかりか驢太郎の皮まで脊負ふ様な苦みはあるまいか因果應報ハ争はれねへものだなア

◎第二百二十四譚

驢馬と買人

或る人が驢馬を買取る約束をして其の持主より飼試しをうた上取極るからと暫時借受て曳歸り數頭の驢馬と一つ厩に入れ翌朝になり

往て見ますと其驢馬の平素一番横着で大食をする驢馬と友達になり
交情よく遊んで居りましたので主人の興をさまじく早々賣主の許へ連
行き「先づ買入の見合せにませう」と断りますと賣主も不思議さう
な顔つき「大層早く飼試しが出来ました子」と云ひますからある人は
「イヤ造作もない事で一夜で飼試しが出来ました實は昨日から厩へ
入れて置ますと此の驢馬が懇意にした友達から其の性質が分りま
た

人の善惡の其友から分ります

◎第二百二十五譚 鴉と狐

或る鴉が一片の肉を盗んで嘴に喰へ喬木にとまりてゆるゆる馳走に
ならうと思つて居ますを狐が下からチラト見付け巧妙彼鴉を騙して
羽の肉を取て遣りたいものだがと考へ「オヤお黒さんは其處にお出

か汝の身体の奇麗な事其上汝のお顔色の美しいことは又た格別で
スチー若し汝のお聲音が汝の身体やお顔色の様に美かつたら誰でも
汝の鳥の女王様だと申しますとせ」と教唆ますと鴉は聲だつて何も其
様におるくはない筈だ狐めに「ツ聞かして遣らうと思ひ一聲高くカ
ーと鳴ますと嘴を開た拍子に喰へて居た肉を落ました、狐は去てや
つたりと思ひ駈よつて銜へながら「ナイお黒さん汝の聲は矢張り鴉
丈けの聲だが汝は大分不才子

ないことをあるやうに言て譽るのの諂諛です夫を聞て歡ぶと諂

諛賃をとられます

◎第二百二十六譚 驢馬と戦馬

或る驢馬の戦馬が平生飼主に寵愛されて秣なども澤山に食つて荷を
一荷運ぶでもなく浴水をくたり髪を結つて貫たりして奇麗くして居

るのを羨ましく思ひ、「ア、吾の様な不運なものはない。秣に充分に食
 いもせず朝から晩まで重荷を挽て少く遅々すると敵かれるとは如何
 した因果か知らんと歎息をして居ました。其後或る所に戦争がはじ
 まり重い甲冑を着た兵士が其戦馬に跨りて戰場へ出ますとやがて戦馬
 は重傷を受けて絶命しました。其時驢馬の戰場の苦みなど考へて、「ア
 、吾れは戦馬と云ふものは大きに樂なものデア、吾れは不幸なもの
 デアと羨んだり歎いたりして居たが斯うなつて見ると戦馬は不幸なも
 のデアの方が何のくらゐ幸福か、これぬ
 人も樂をするると苦みが出来、苦辛をするると樂が出来、樂ばかり
 志やうと思つても爾はなりませぬ

◎ 第二百二十七譚

竊柴奴と山鳥と鶏

黄昏に竊柴奴を生業にする人が野菜ばかりで晚餐を食うとしてゐる

處へ圖らぬ友人が久闊で尋ねて來ましたから酒でも出さうと考へま
 した。其日は不獵で竊柴に何んにも罹りません。ソコテ是非なく囹に
 使う山鳥でも縊めてやらんと其準備にかゝります。と山鳥が「主公、若
 し私が死くなりましたら以來は竊柴をお掛なされた時誰れが他の鳥
 を竊柴に呼寄せます。誰れが主公に鳥を捕らせます」と云ふゆゑ竊柴
 奴が成程彼奴の言ふ通りだ。彼奴を殺めてはあらんと其事は止ました
 が何も下物がなくては酒が飲めぬ。と今度は時に往て鶏を引出さうと
 志ます。と鶏の哀れな聲で「主公、私をお殺しなると主公に夜明けを
 知らせるものがあります。と誰れが主公の生業に晚れないやうに朝
 早くから主公を起します。誰れが主公を起して鷹獵を見まはらせます
 」と口説きます。と竊柴奴は「成程汝の言ふ所も最もだ。汝は毎朝吾が朝寢
 をしない様に警醒で呉れるの、汝だ、志か、吾は訪問て來た友人と

酒を呑ねばならないと云ふ事が出来たのだ

必要の時には規則は守れぬものでございます

◎第二百二十八譚 乗馬と磨舎業

或る乗馬が追々齡が老つて軍に出ることが出来ませんので磨舎に住みこみ毎日粉を挽て居りますから矢石の中を潛り抜ける危険はなくなりまゝたが毎日く降つても照つても車を廻して居るのも随分樂なものでないといふ以前の事を思ひ出し仕合の好つたのを熟々考へてトボく磨を挽きながら主人を回顧り「主公、吾は以前乗馬であつたときは脚から尾に至るまで立派に馬具を着飾り厥卒は一人附切りで軍に出て大層働きましたたが不圖了簡が變つて來て軍に出るよりは磨舎業に雇はれた方が好いといふ氣よなツたは如何した理か私には一向知れませんが」と云ひまゝと主人の「汝昔日の事を思ひ出して愚痴をこ

ぼすのは止いなさい運命が好くあつたり悪くなつたりするのは世の中の常だ

雇人などが何んでも仕合の好くなるやうにと度々住替をするのは其住替をする度毎に運命を縮めて行くのです

◎第二百二十九譚 醫師になつた蝦蟇

或る蝦蟇が一度沼の中から這出て諸獸にむかひ「拙者は世界の大醫で御座る藥劑の調合に妙を得て居ます如何なる難病といへども私の診察で治癒らぬものはない私に掛て廣告の虚からざるを知り給へ」と大聲で奴鳴て居ますと或る狐が此聲を聞つけ早々飛來て「イヤ蝦蟇大醫先生足下は御自分の跛の歩行方や身体の皺をお治療なさることが出来ない僻になんぞアア大言が吐けますなア

人の中にも此蝦蟇のやうな名醫がないとも言へません

◎第百三十譚 猫と鷲と女猪子

或る鷲が高い榊樹の頂上に巢を造へて居ますと或る猫が恰好其幹の穴に仔を産んで居ました又た其樹の根に穴があつて其穴には女猪子が自分の仔を連れて居住をして居ました、そこで猫へ自分の伎倆で其鷲や女猪子を甘く騙して其邊の食物は皆な自分の所有に志やうと思ひ或る日鷲の巢にゆき「ナヨイト私はお報知に來ましたが御同様は今に危険なめに遭ひますぜ貴君も御承知の此樹の根に住居である野猪子は毎日〜此樹の根を掘て居ます夫れは如何いふ次第かと能く〜探ッて見ますと此樹を倒して我々が此の喬いところから落ちて來るを下に居て捕殺して餌食に仕やうと云ふ心算ださうです」と充分鷲を恐怖して置いて今度の女猪子の住所を訪ね「何んどマア大變ナ事が出來かゝつたから窺とお報知申しますか此頂上に住居で居る鷲

は甚だ心底の好くない奴で汝の御子息などがブラ〜食物でも探〜に出ると直ぐに攫去て仕舞はうと云ふ了簡で此頃は間がな隙がある其事はかり考へて居る様子ですから少〜も油断はなりません私も早く歸て成だけ外出はしないやうに仕ませう」と女猪子を騙して挨拶うこ〜に歸りました、そこで猫は白日の間は恐怖た風体で外へ出ずに居りまして夜分になると狐鼠出かけて其の近邊の餌食を獨りでせしめて居りましたが鷲は猪子に恐れて榊の枝に止つた切り猪子は驚に怖れて自分の住穴から少〜も出ないで居ましたあら二三日すると食する物もなくなつて、どう〜飢死をいたしました是れに引替へて猫は食物の充分あるところから贅澤な生計をして居ました

世の中には他人を苦しめて我身一人で榮華をするものが澤山あります

◎第三百三十一譚 蚊と牛

或る時一疋の蚊が牛の角にとまり「私は汝に問ひたいことがあつて
 来た汝は何故其様に不幸なお方々、マア其様大きな身体ではあり
 方も強いのに人が如何なことを仕向ても何の口答もせず奴隷の取扱
 を受けて居なさるのは如何いふ了簡々私には汝と違つて斯な小さな
 動物だけれと思ふ存分に人の肉を嘗めたり血を吸たりして遣ります
 一と牛の了簡を尋ねながら自分の活計を譽めよすと牛は「私は恩を受
 たのを忘れないのが本望でございませす私は人々に可愛がられて食物
 も澤山貰ひ私の頭や肩を輕打てくれ人々に敬つて事へます」と答へ
 ました其時蚊は歎息して「オヤマア左様ですか私は汝がお好のやう
 に頭や肩を輕打れたら其時こそ私の運命の盡頭です
 自分を愛する人を喜ぶのは當然の事です」

◎第三百三十二譚 海豚と鯨と鯔魚

海豚と鯨が或る時不和になつて戦争をはじめましたが双方とも水花
 を散らして戦つて居ますと鯔魚が波浪の間から頭を出して「双方共私
 を仲人に頼んだなら程好く仲裁をして遣るがなア」と言つたのを海
 豚が小耳に挿み我々の紛議に汝が立入るやうなことをするくらゐな
 ら鯨と引組で討死をした方が勝た哩
 分限を辨へぬと間々耻をかく事があります

◎第三百三十三譚 驢馬と蛙

或る驢馬が材木を脊負て小さな水溜に來て其中を歩行て居ますと如
 何した機會か立脚地を失つて水の中へ倒れ大きな荷物を脊負つてお
 るものですから起きられないで困つて居ましたスルト其近邊に住で
 居る蛙共が之を見て「驢馬さん汝は眞の水の中へ轉んだと云ふまで

の事じやアないか其れに左様大騒動を遣るやうでハ若私共のやうに
始終此の中に住で居たならマア死んで仕舞ふだらう

人は大きな不幸を堪へても僅少な悲みに堪へないことが度々で
ございます

◎第三百三十四譚

捕鳥奴と蝮蛇

或る捕鳥奴が綱竿を提げて捕れさうな鳥は探して居ますと或る樹に
小鳥が囀つてゐるゆゑ此奴占めたと綱竿を手盤に延し餘念もなく小
鳥に目を着け徐々近寄りますと足元に居た蝮蛇の頭を踏みましたから
蝮蛇は驚きイキナリ足を刺したから堪りません捕鳥奴は悶絶ながら
歎息して「ア、吾ハ小鳥の命を奪ふと思つて此方の一命投ねばなら
ぬ

小さな利益に暗らむと大きな害を受けることがありますら物

事は能く勘辨をつけねばなりません

◎第三百三十五譚

黒奴

或る人が一人の黒奴を買入れ友人にむかひ「斯なに黒いのは如何
に譯だらう」と尋ねますと友人が「ウン是れか是れは前の主人が情な
くに使つたからサ」と答へましたソコ其人ハ其黒奴を我家へ連歸
り眞裸よして毛拂や石鹼や砂や種々の洗濯具を持出して摩擦たり洗
たりして見ても皮膚はますます眞黒になつて少くも験もなく黒奴は
長い間水に漬られた爲め風邪をひるて床に就きました

骨に生たものは肉よ着きます

◎第三百三十六譚

鳶と白鳥

鳶と白鳥は美しい歌を謡ふので特許を得て居ましたか或る時馬の嘶
くのを聞て如何した感覺の間違ひ已かれも彼の鳴法を學ねて見度と

頻りに練習を志して居る中肝腎の自分の歌は忘れまゝた
未來の利益のみ想像してゐるものは動もすると現在の幸福まで
失ひます

◎第三百三十七譚 狼と獅子

或る狼が山の上に吼へて居ますと西陽よなつて自分の影が大層大き
く見えまゝた、うて自分が考へますに「吾は斯様に大きな身体で長
さも一エーグルもありながら何故獅子が怖いのだらう全体己れは諸
獸の王でなければならぬ筈だが」とズット慢心して油断をして居
ますと獅子が不意に飛で来て捕殺しまゝた其時狼は後悔をして「己
れは何故如斯愚痴だらう益にもたぬ事を思つて一命を果すことよ
なつた

◎第三百二十八譚 膨脹した狐

二三日も食物れありつゝかないで居た狐が牧羊者が柵樹の洞穴に隠
て置いた蒸餅と牛肉とを不圖見付け出し其洞穴へ這込んでムシヤク
食ますと餘り食過ぎ腹が膨脹れて洞穴から出られなくなりグウ
呻吟ひて居ますと其處を通りかゝつた友狐が聲を聞き付け「ナイ汝
は其中に何を志して居るんだ」と尋ねます」と洞穴の中から斯くくの
次第と言ひまゝた友狐「ア、左様云ふ理か其なら汝の腹鹽梅が
丁度其洞穴へ這入る時分と同セやうになつたら出られるから其迄で
其處で待つのがサ

◎第三百二十九譚 鵝と鵝鳥

或人が鳥屋の前を通りかゝり鵝と鵝鳥の居るのを見て此二羽で幾許
價だと尋ねますと幾許々々と答へまゝた即今入用の品でもないが價
直が賤いから買ませうと價金を拂ひ家へ持歸りまゝた鵝鳥は不意に

客人のあつたとき料理の手當として置き鴉鳥は奇麗な鳥だから観物の爲めにと同庭の鳥檻に入れて置きまゝたがサテ或夜客人があつたので料理人に鴉鳥で一酌の準備をせよと吩咐ますと料理人の畏まり鳥檻のある處へ往て見ますと眞闇で分りませんから大概是だらうと手探りで鳥を引出し縊殺やうとすると苦まされよ一聲高く鳴たので料理人は「ホイコ」は間違へた鴉鳥ではなくつて鴉鳥だつた

●第四百十譚

梟と鳥籠

梟は夜間食物を探りに出ますゆゑ晝間はゆつくり寝て置かねばなりませんや或る處に住む梟の鳥籠が一日やかましく鳴ので落着て眠る事が出来ませんソコ鳥籠に向ひ少し静かにして呉れと頼みまゝたが中々承知せず以前よりは聲高に鳴たてますので梟は腹を立て彼奴は吾を馬鹿にして居るのだナ何か手術を設けて彼奴めを喰殺して

遣り度ものと考へ或日鳥籠に向ひ「お前さんのお聲は如何にも琴の音を聞くやうで面白つて寝られませんが先日或所から貰つた甘露を呑みながらお前さんの琴の音を聞たいと思ひますお前さんも甘露が御好から呈上ますから何卒御入來を願ひます」と言へば鳥籠を何よりの好物ではあり殊に聲を響められた嬉さに早々梟の住居へ行きますと梟は突然鳥籠を捕へて喰殺しまゝた

忿心が起ると前後の思慮がなくなります

●第四百十一譚

兇殺人

或る惡漢が人を殺しまゝたゆゑ其同胞親屬のもの等が追掛けますと命からかく逃げのびて或る大河の邊へ行きますと前途より大きな獅子が遣て来て一口に食はうと致します進退谷まツて何志やうかどあたりを見廻しますと大樹があるので忽に其樹へ上りますと其枝には

大蛇が絡つて居て是も一呑に吞まうとして居ます是ではならぬと又た〜何中へザンブと飛込みますと其處に居た鱈が得たりと一噬に噬み殺しました

人を殺すやうな大罪人は天にも地にも居る所へございませぬ

◎第四百十二譚 農夫と獅子

或る獅子が農夫の庭園へ飛び込みますと農夫は其獅子を捕らうとして門を鎖閉して仕舞ひました、すると獅子は出るには出られず焼腹を立てまゝて其處に飼てある羊二三疋を捕殺し又た飼牛にも取てかゝらうとするゆゑ農夫は是で我身も危険と忽ち怖氣だち直ぐと門を開けますと獅子は一散に逃出しました、スルト農夫は獅子に捕殺された羊のことを大層残念がつて居ますと最初から此騷擾を見て居た女房が「良人の遠くてさへ獅子を見ると恐ろがッて逃げてお出のく

せに其獸を捕へやうなど、は狂人の沙汰ではありませんか

◎第四百十三譚 大陽を訴へる蛙

或る時大陽が妻君を迎へらるゝどの評判を或る蛙が聞て空天に向て大聲をあげ何やら訴へる様子ゆゑ「ジユピター」(神名)が出現まゝ〜て蛙に向ひ「其方は何か願ひごとでもあるか常になき大聲を立てるな」と問ひ給ふと蛙は「へい〜申上ます此頃の評判に大陽が細君を迎へらるゝどのことございます然るに是迄で御獨身の時でさへ我々が住居をいたします沼などを乾くあげて我々の一命に拘はるやうな事をなされた事が度々ございますに又た此上細君をお迎へなされてお見達でも出来まゝたら我々どもは此後如何なめに遭ふか其れが案じられてなりません

◎第四百十四譚 人と獅子の争

或る人が獅子と連立て旅行を志すが互ひに力自慢をはじめ獅子より人が強いナニ人より獅子が強いと双方言慕て居たところ路傍に勇者が獅子を踏へてゐる石像の立てあるのを見て「コレ此通りだ是れより汝の方が強いと云ふなら何ぞ其証據を出さなければならぬ」と人が勝つた心算で居ると獅子は「へ、ん夫は手前勝手の論だ是れは誰れが造へたのだお前方の同類だらう若し獅子が斯な石像を造へることを知て居たら人が獅子に踏み付けられて居るところを拵へて見せるだらう

愚論でも通用するのは名論の出るまでございます

◎第四百十五譚 神佛の議論

古典に依ると初めて人を造つたは歳徳神、家を造らへは才智菩薩、牛を造つたは海王權現ぞと書てありますとて此神佛等或る所に會

合し給ひ各々我が製作を自慢して議論中々烈くなり到底諧謔尊者に其判断を任せんととの相談調ひ其事を尊者に言ひ込みますと尊者は忽ち裁判官の地位に立ち先づ牛を指して曰く「是れあるは海王權現の製作ならんか其角の位置は眼の上れありて敵を突く時見ること能はず故に其製作宜しからず」と次に人を指して曰く「是れ歳徳神の製作と見受たり身体の外面に心を作らざりしを以て是れは邪人ありとて避け是れは善人なりとて近くことを得るの便利を缺けり故に此製作も完全なりと云ふべからず」と次に家を造りて曰く「是れ才智菩薩の製作なるべし此家に鐵製の車なきは遺憾なり何故なれば若し近隣に悪人などの住居することあるも我家を他へ轉ずること能はざればなり」との裁判でございましたソコ歳徳神は大に怒り給ひ「尊者よ汝は實に嫉妬の深き奴なり己れ完全なる一物をも造らずして我々が裁

斷を委任したるを僥倖に只だ我々の製造にかゝる短所のみを擧げて
批判するとの不屈千萬であると云ひさす忽ち尊者を裁判官の位地よ
り引おろし「ナリンビュス」山より追出し給へり

◎第四百十六譚 農夫と鶴

或る農夫が新に田へ種を蒔きつけ鶴が喰あらすのを氣遣ひ尻を仕掛
けて置きますと果して鶴が方々あら下りて來て忽ち其尻にかゝりま
した、そこで農夫が其鶴を一羽づゝ捕へますと其中に鶴が一羽居て
其足には傷が付て居ながら哀はれた聲を出して「旦那さん何卒私は
お助け下さいませ〜」云レ此通り私は足にも怪我をした位でございませ
何卒お慈悲を願ひます私は鶴とは違ひまして眞に氣質のよい鶴で
ございます私は父にも母にも孝行なものでございませす此羽根を御覽な
さつても解りますす全く鶴ではございません」と色々と歎きますと農

夫は笑ひながら「成程汝の言ふ通りぢや鶴でないことは能く解て居
る、志かゝ汝は鶴と云ふ盜賊と一緒に捕られたからは其死ぬ仲間にも
入らねばならぬ

◎第四百十七譚 赤禿頭の武士

或る人老年て頭の髪がなくなり赤禿頭となつたゆゑ常も假髪を付け
て居ましたか或日二三の友人と馬に乗て狩に出かけ痛く馬を走らせ
ますと折ふし風が吹て其假髪を吹飛ばし元の赤禿頭となりました其
處で友人が笑ひ出すと赤禿翁も可笑ありて「生れた時から生へて居
た髪でさへ頭に居ないやうになつたもの假髪が此頭に辛包しては居
られないも無理はないのサ

◎第四百十八譚 狼と羊仔

或る羊仔が羊舎へ歸る路を迷つてうろく〜して居ますと或る狼が之

を見付け「彼奴を捕殺して遣りたいものだが夫れにしても手荒なことをせず何か道理をつけた方が宜いと考へノサク羊仔の傍へ行き「ナイ先生愚弄の意」汝は去年余を侮辱たことがあるが其れを覺へて居るか」と言ひますと羊仔の面色を變へ「汝は何を言いなさるを私は今年生れたのだから去年汝を侮辱たことはない」と答へますと狼は又た汝は日外余の井戸へ来て水を飲んだことがあるだらう」と言ひますと羊仔は「否々私は阿母の乳を水や食物の代りにして未だ水を飲んだことはありませんと井戸などへは覗いたこともありません」と答へますと狼は面倒臭いといふ氣色をして「汝は余の言ふことを彼是れと辯解をするが余は腹が減つて仕方がないから如何しても汝を逃しては置かれまい」と言ひながら忽ち羊仔を捕へ遂々食殺してしまひました

◎第四百四十九譚

狼と家犬

或る狼が能く肥て居る家犬に出會ひ其頸輪から長い鎖で大きな木片を附けて居ますのを見て「コソ犬さん汝は大層食物が要るだらうが其れを構はずに汝を養つて居るのは誰れたエ又た其様重ひ物を引摺らして居るのも到底其飼主だらう」と問ひますと家犬は「私の主人サ其外に私を養つたり如斯物を引摺す人ははいワ」と答へますと狼は汝の主人は奇異い人だなア私等の友狼には汝の主人見たやうな馬鹿なことをするものはないと能く考へて見なされ其様重い鎖や木片を附けて居ると幾許食へても腹が飢りどほくだから

眼糞が鼻糞を笑うと同じ事です

◎第五百十譚

負傷の狼

或る狼が暴犬に噛まれて傷を負け身軀が自由になりませんので小山

の端に臥て居るところへ一頭の羊が通りかへりまゝたゆま狼は「是所から少し離れた所に流れがあるから何卒水を持って来ては呉れまいか左様して下されば食物は私が自分で都合します」と言ひますと羊は中々油断せず一なる程其負傷では嘸お困却でせう併し私が水を持って来て上るとお前が自分で都合すると云ふ食物は私の身體でいりませんか

外見を飭つた話説は直に其心が分ります

◎第百五十一譚 獅子に使役れる狐

或る狐が獅子にむかひ「私は餌食になる獣を見付ますから汝は其をお捕なさい爾して交情を好く暮しますとお互の爲めですから何卒宜敷お願ひ申ますと言ますと獅子も成程それは双方の爲めだと思ひ忽ち相談が極り其後狐は餌食となる獣を見出すを自分の職分と獅子



此画は本書中の一譚に
其有様を寫し出したるもの
て右側に番号を付け
るべし
通讀の時其便を圖りし
ものなり

の端に臥て居るところへ一頭の羊が通りかゝりまゝたゆま狼は「是所から少し離れた所に流れがあるから何卒水を持って来ては呉れまいか左様して下されば食物は私が自分で都合します」と言ひますと羊は中々油断せず一なる程其負傷では嘸お困却でせう併し私が水を持って来て上るとお前が自分で都合すると云ふ食物は私の身體でへありませんか

外見を饒ッた話説は直に其心が分ります

◎第五百五十一譚 獅子に使役れる狐

或る狐が獅子にむかひ「私は餌食になる獸を見付ますから汝は其をお捕なさい爾して交情を好く暮りますとお互の爲めですから何卒宜敷お願ひ申ますと言いますと獅子も成程それは双方の爲めだと思ひ忽ち相談が極り其後狐は餌食となる獸を見出すを自分の職分と獅子



此画は本書中の一譚のことに
其有様を寫し出したるものに
して右側に番子を付けし
通讀の時參觀の便を圖りし
ものなり

は其を捕るのを職分にして居ました。が不圖狐は慢心を起して獅子に向ひ「私は餌食を見付けるのが職分ですが私だつて何も夫が捕れぬいどいふ譯は有りません私も明日からは自分で餌食になる獸を捕て見ませう」と断はりましてサテ其翌日の朝早々一頭で狩に出ます。とたちまち獵犬に邂逅ひ逃げやうとする間に早や獵夫に銃撃れて自分が人の餌食になりました。

◎第百五十二譚 獅子と牡猪子

夏の炎天になりますと動物は何れによらず咽喉が渴いて来るものでございませうが獅子も咽喉が渴いて堪りませんから水を飲まんと或る井戸へ來ますと牡猪子も其處へまゐりまして余が先だイヤ余だと口論をはじめ果は大喧嘩となり必死となつて噛合つて居りました。が其中に双方とも疲勞が來て一時合引になつて其處へ倒れんと鴉が此の戦

ひを見て居て若く孰か殺されたら直ぐに御馳走にありつくと云ふ様
子で待て居ますソコテ獅子にも牡猪子もツマラヌ喧嘩だど心づき一
何んと相互の戦争は止めにして交情好く志やうではないか若く啗合
て死んで見なさいアノ鴉めの餌食になるに違ひないせ

新譯 伊蘇普物語目錄上終

新譯 伊蘇普物語下

青溪散史 譯

○第一 孔雀と鶴

或る孔雀が美しくき尾羽を廣げまゝして鶴に向ひ「予の羽翼に虹霓色の彩があり又尾に金色と紫色の珠玉の飾りがあつてナント國王の様で立派であらう見れば汝の着物に少しも彩色がなくマア見苦しい形状でないか」と散々に侮りますと鶴は「實に汝の言ふ通りだ併し予の羽翼で高い天上へ飛揚ることが出來予の聲は星にも届きます足下あどの群鶏同様に地の上を歩行廻るばかりで羽翼のさがぬ下鳥と違ひます」

羽翼が美麗おばかりでの貴い鳥と申されぬ

○第二 譚 蠅と蜜壺

或る砂糖商の店に居へてあつた蜂蜜の壺が顛倒りますと其處等を飛び廻つて居た數多の蠅の此處をと思ひむらくと集りまして其蜂蜜を満腹嘗めましたが少時すると足の利なくなり氣の重くなりまして飛ぶことも歩行むことも出来なくなりまして、うここで蠅共の大息を吐きながら「ア、愚なことをした餘り嘗め過ぎたものだから自分で自分の命を失ふ様なことになつた」と異口同音に悔みまして餘り愉快が過ると痛苦が出来ます

○第三 譚 熊と狐

或る時熊の狐に向ひ「我輩の人が途に倒れて居ても死んで居ると見れば之を避けて害を加へる様なことなせぬ」といへば狐の苦笑を志しながら「もし汝等が生て居る人を食へなければ汝の話も最だと思ひ

ますのさ

死人を敬ふよりの生きて居る人に害を爲ぬが宜ひ

○第四 譚 豕と羊と山羊

或る小豕が山羊や羊と同つ園内に閉込まれて居ましたが有一日牧羊者へ其小豕を捕へやうと志ますと小豚は彼處此處へ逃げまはり容易牧羊者の手に乗りません其時羊と山羊へ小豕に向ひ「汝は何故其様に意地を悪くするんだ私共だつて牧羊者に捕まることへ度々だが何時も汝の様に逃廻りへ志ないぜ」と言ひますと小豕は怨めしうな顔色をして「汝達の捕まるのと私のハ事が違ふ捕まつたどて汝達と毛を取られるか乳を搾られるばかりのことだが私のハ其れが此世ハ黄泉の境界だものさ

○第五 譚 旅人と熊

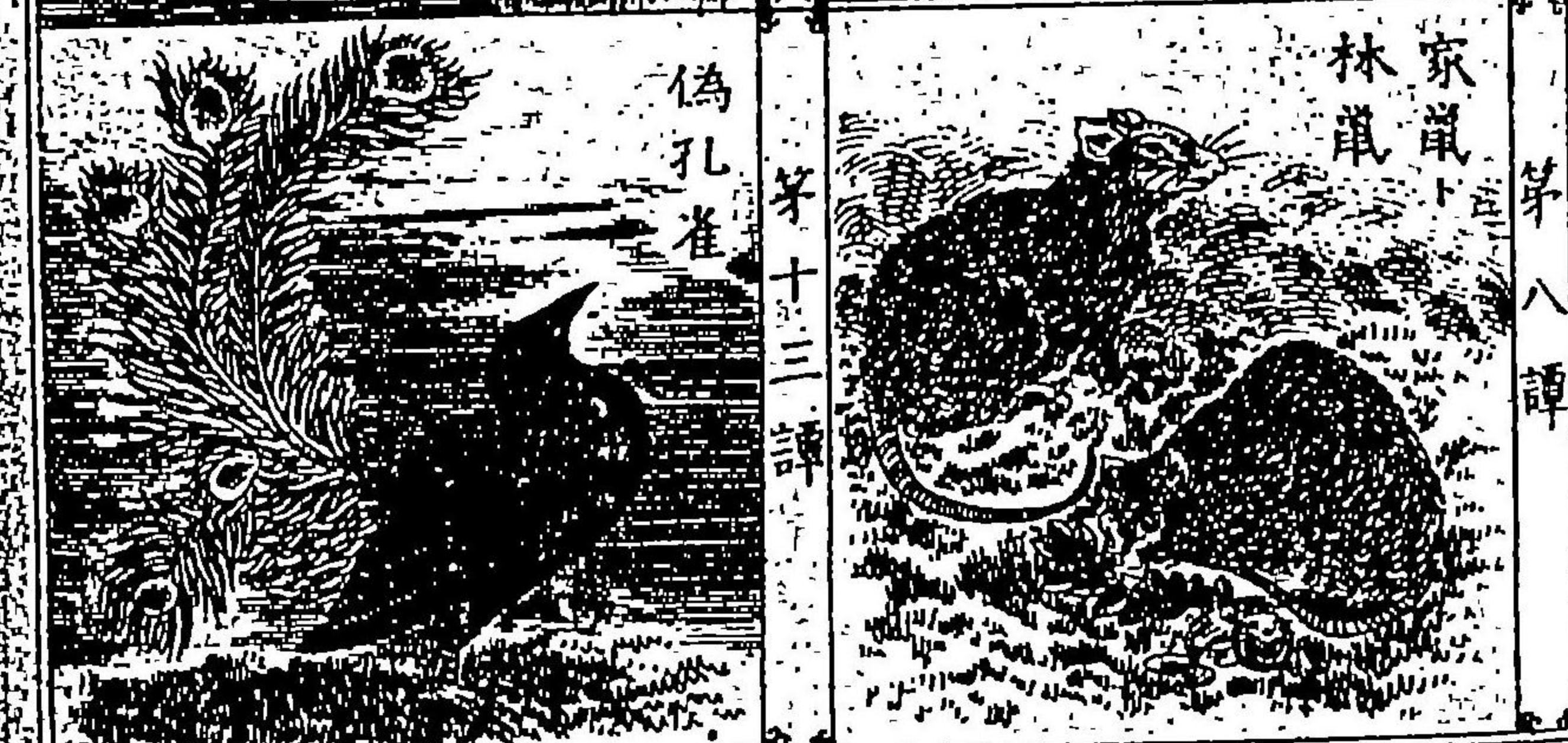
二人の朋友同志旅行をして有一日山路に差かゝりますと一人の目早く熊の來るのを見て驚き朋友に何の仔細も話さず我れ一人傍への樹に上りました、そこで一人の何事かと能く見れば恐ろしい熊が此方を目がけて参ります最早逃る道もありませんが、熊の死人に構へないとかねぐ聞た話を頼みに地に倒れて死んだ真似をして居ると熊は徐々と此處へ來て耳や鼻や脚のあたりを嗅ぎ生て居る人かと考へて居たが全く死人に違ひないと思つて徐々と其處を立去りますと樹の上居た友人が降りて來て我が不眞實を言紛らへす氣で友人に向ひ戯言らしく「今熊が汝に何か耳語をした様子だが如何な事を言ひました」と問ひますと死人の眞似をして居た友人は「ナニ他の事でもない、何んでも危険い時に自分の身ばかり構つて友人を見捨てるやうなものと同道に旅の出來ませんと異見を言つて呉れたのだと



第五譚 旅人と熊



第六譚 獅子の悪業



第八譚 家鼠と林鼠



第十一譚 佛像を運搬する馬



第十二譚 狐ト雄



第十三譚 偽孔雀

二人の朋友同志旅行をして有一日山路に差かゝりますと一人の目早く熊の來るのを見て驚き朋友に「何の仔細も話さず我れ一人傍への樹に上りまゝた、そこで一人の何事かと能く見れば恐ろしい熊が此方を目かけて参ります最早逃る違もありませんが、熊の死人に構へあいとかねぐ聞た話を頼みに地に倒れて死んだ真似をして居ると熊は徐々と此處へ來て耳や鼻や脚のあたりを嗅ぎ生て居る人かと考へて居たが全く死人に違ひないと思つて徐々と其處を立去りますと樹の上居た友人が降りて來て我が不眞實を言紛らへす氣で友人に向ひ戯言らしく「今熊が汝に何か耳語をした様子だが如何な事を言ひました」と問ひますと死人の眞似をして居た友人の「ナニ他の事でもない、何んでも危険い時に自分の身ばかり構つて友人を見捨てるやうなもの同道に旅へ出來ませんぞと異見を言つて呉れたのだと



旅人と熊

第五譚



獅子の急慕

第六譚



家鼠と林鼠

第八譚



佛像を運搬する驢馬

第十一譚



狐と鶴

第十二譚



偽孔雀

第十三譚